
至空の時 1 . 5 今までの道・それからの道

白石めぐみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

至空の時1・5 今までの道・それからの道

【Nコード】

N0516D

【作者名】

白石めぐみ

【あらすじ】

至空の時の前後の話を寄せ集めたオムニバスです。孤独を胸に集った4人の少年少女。彼らはそれぞれの事情に巻き込まれながらも互いを守ろうと道を選択していく。

序章：今にいたる道（前書き）

『至空の時』にいたるまでの話と地球とキユスリア、分かれた世界でのその後の話を纏めたオムニバスです。

主人公が理・威・冨野・恵吏・剣人&裕穂になるので、サブタイトルの前の方で主人公の切り分けを、後ろのほうで物語のつながりを示します。

話はそれぞれに単体で読めるように書くつもりです。

序章：今にいたる道

すべての物語は、4人が出会うところから始まった。

一人は親が裕福すぎて、周りの子供や親から仮面のような笑顔を見せつけられていた『孤独な少年』

『孤独な少年』はまず母親がハーフで、母子家庭だという『癒しの少年』と出会い、仲良くなった。

『癒しの少年』は他の子供と違い、『孤独な少年』を普通の少年と見てくれた。

『孤独な少年』も、『癒しの少年』の家庭の事情など余り気にせずにつき合っていた。

そして『中心となる少年』が現れる。

母親を目の前で亡くし、すべてを排除した『中心の少年』は『孤独な少年』の義兄となった。

『孤独だった少年』はそのことを喜び、『中心の少年』の『義弟』おとつととなることを喜んだ。

しかし、彼は『孤独な少年』と自分の違いゆえに、彼を嫌ってしま

う。

心を閉ざした『中心の少年』はやがて『義弟となった少年』が連れて来た『癒しの少年』に生きる希望を見い出した。

そして『癒しの少年』を守ることを誓い、『義弟』にも敵意を持たなくなった。

最後に『唯一の少女』がその中に入った。

彼女は特別だったがゆえに父に嫌われ、母に疎まれた。

父に研究室に連れて行かれては実験動物のように沢山の管に繋がれ、傷つけられた少女。

偶然に彼女と仲良くなった彼らは彼女を助けることを願い、『義兄弟の両親』の力を借りた。

その力は絶大で彼女は開放され、彼らの仲間に入ることが出来た。

4人はそれから常に一緒にすごし、楽しい時間を過ごした。
しかし時間は永遠ではなかった。
まず『唯一の少女』が父親の都合で彼らから引き離された。
そして、『中心の少年』が風に浚われ違う世界に閉じ込められた。
残されたのは『孤独に戻った少年』と『癒しの少年』。

そして

中心の少年は、彼らのもとに帰ることを誓った。
孤独だった少年は、彼を取り戻すことを誓った。
癒しの少年は、彼を待つことを誓った。
唯一の少女は、残った彼らを守ることを誓った。

物語は次のステップへと繋がる。
それは、まだ見えぬ未来のこと。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

注意事項

短編集の主人公は題名によって違います。
また時系列順に出てくるとは限りません。以下の年表を参考にして
見てくださると助かります。

タイトル

夜の無い一日シリーズ・・・麻樹理あさきり（全体の主人公）が中心。
至空の時の前の話で前は地球世界（日本）

夢見の家シリーズ・・・麻樹威あさきたけが主人公。

アメリカ)が舞台。

至空の時の前・後の話で地球世界(日本・

この場所からシリーズ・・・月路つきじ恵えり史が主人公

至空の時前後の話で地球世界(日本・ア

メリカ)が舞台。

ONCEMOREシリーズ・・・山下やました洸こう野が主人公

長い話になるので、ここに入らない

可能性大

花の午後・花の朝シリーズ・・・御園みその裕ゆう穂と山下やました剣けん人が主人公。

午後が剣人の話で、朝が裕穂の話。

年表

基準は主人公(理)の年齢で表示されます。彼の誕生日は8月15日なので、夏で年齢が切り替わります。

5歳冬

夜のない一日1

8歳冬

この場所から2 Shuffle!

13歳春

夜のない一日2

15歳夏

この場所から1 G o t t h e

n e x t d o o r

15歳冬

ONCEMORE

15歳初夏

至空の時(連載終了)

15歳夏

夢見の家 出会い

16歳初秋

夢見の家 回想

16歳秋

夢見の家 選挙

16歳初冬

この場所から3 R e t u r n t o

Dreamin' House

- | | | |
|------------|------|-----------|
| 16歳冬・クリスマス | 夢見の家 | 追憶 |
| 16歳冬・三学期初め | 夢見の家 | 帰郷 |
| 16歳春〜初夏 | 夢見の家 | 女装 |
| 16歳夏 | 夢見の家 | 異変（青炎の異変） |
| 18歳春（卒業） | 夢見の家 | 卒業 |

「青炎の目覚め」は理たちが生まれる前の話になります。

「調和女神の憂鬱」の主人公は理たちのすぐ下の後輩で時期としては『夢見の家 選挙』ぐらいになります。

序章：今にいたる道（後書き）

とりあえず、序章で理・威・泷野・恵吏の出会いの概略を説明してみました。

『中心の少年』が麻樹理（旧姓は望月）

『孤独な少年』『孤独だった少年』が麻樹威

『癒しの少年』が山下泷野

『唯一の少女』が月路恵吏

『義兄弟の両親』が母親である麻樹実と父親である麻樹良弘（良弘

は婿養子で旧姓は松原）

以上ようになります。

夢見の家 出会い1 (前書き)

至空の時、から1ヶ月くらい後の地球世界です

夢見の家 出会い 1

突然の風がすべてを乱したあの初夏の日

すべてが始ま

り、終わったあの日。

『異世界』へと連れ去られ、自分ひとりだけ帰ってしまった。『あの一日』から自分の中の何もかもが変わってしまった。

残ってきてしまったという後悔。重くのしかかる約束と責任。

ほんの少し前まではすべて義兄がやってきたこと・・・将来の期待までがすべて彼自身へと振り替えられ、それとは逆に役目を果たさずに『消えた』ということになった彼に対しての悪言雑言がフィルターを通して自分の耳に入ってくるようになった。

『義兄』がいなくなつて自分がどれだけ守られていたのか、今更ながらに解るようになった。

どれだけ、思つても仕方のないことだ。彼・麻樹威は自分に言い聞かせるように反芻すると病院までの道のりを歩き始めた。

どれだけ後悔しようと思は・・・義兄・理は帰ってこない。

どれだけ守ろうと思つても・・・降り積もるように加算されてゆく自責は一切消えはしない。

悪夢が身体を蝕もうとするように、彼の精神を雁字搦めにしていた。

麻樹 威・十六歳・晩夏

威は一つ大きな溜息をつくと来なれた病院の建物を見上げた。

麻樹の資本で立てられた病院は、その潤沢な資金ゆえに充実した設備と優秀なスタッフにより国内・・・いや世界でも知られるほどの大病院である。

その病室の中に、彼が会いにくく少女は入院していた。

「お兄ちゃん、授業は終わったの？」

威の妹・由宇香^{ゆうか}は義兄・理が行方不明になったあの日から本格的に体調を崩してしまい、とうとう自宅療養から入院に切り替えられ、24時間態勢で治療に当たられていた。

しかし彼女の体力は日に日に衰えており、すべての医療スタッフからは家族に「覚悟」を求めてきていた。幼い妹は常に生きようと努力しているのに、彼女の中の病魔は理がいなくなって寂しさに震えている彼女の身体へと容赦なく牙を剥く。その鋭い牙にすぐにも彼女の生命^{いのち}を食い殺してしまいそうで、威は気が気ではなかった。

「ああ、由宇香は今日は何をしてんだ？」

威は出来る限りポーカーフエイスを装いながら、妹に問い掛ける。病気により外で遊ぶこともできない彼女の透けるように白い肌が、どこか痛々しく見える。

「今日は、お絵かきよ。外の景色もかきたいんだけど、中庭にも出ちゃ駄目って言うの」

由宇香はつまらないとばかりに口を尖らせると窓から見える風景に視線を移す。

まだ10歳の普通の少女だ。だが、どこか自分の死を悟っているのか、彼女は自分の病状を両親に訊ねることもせず、ただ自分の生きた証だとばかりにスケッチブックに絵を描き続けている、

「冨野お兄ちゃんは？」

由宇香は持ちなれたスケッチブックを膝に乗せると、いつものように傍に居る兄の顔を描き始めた。

傍に置いてある書き終えたスケッチブックを見ると、そこにはアメリカから帰ることもできずこの病室に訪れることができないはずの威の親友である月路^{つきじ}恵^{えり}吏の顔や、行方不明の……威が異世界に置き去りにしてしまった義兄・理の顔が描かれていた。

「威お兄ちゃん？」

「ん……ああ、山下だっけ？あいつは学校の用事があるからか遅

れるって言った」

威は今見た絵ものから受けた動揺をおくびにも出さずに、妹の問いに答える。

彼と同じく、理がどうして行方不明になり……その上、自分で連れ戻すことが出来なかったと悔やんでいる友人・山下洸野やましたこうやはそれでも、気丈に振舞いながら由宇香への見舞いとして病院に日参している。今日も用事さえ済めば、彼女の病室に訪れることだろう。「今日はね、あつくんたち『体験学習』なんだって。みいちゃんも、れなちゃんも、あつくんたち、明日、お土産を取ってきてくれるって言ったの」

あつくんというのは1年ほど前、由宇香と出会った少年である。まだこれほどまでに体調も悪くなかった彼女のたつての希望で、特別措置として母親みのるが副理事長を務める小学校に数ヶ月だけ通ってわせてもらった際に出会った。たしか名前は篤あつしだったと威は思い出していた。

だが、その少年も病院に訪れるたびに少しずつ元気を無くしているのを周りは知っていた。

『僕は、平気な顔をして彼女と会話できるだけの自信がありません』
つい、先日、彼はその胸の内を威と洸野こうやの前で激白した。

それはそうだろう。彼としても始めて向き合う『死』というもの……それも自分と同じ時間しか生きていない者の死を受け止めるというのが無理な話だ。

それでもその告白の後でも由宇香に逢いに着てくれる彼を威は少なからず尊敬していた。

「そうか、楽しみだな。明日、俺が来る時に、それ、見せてくれよ」
「うん」

今にも消えてしまいそうな、儂い輝きをもった笑顔で答える妹に、威は精一杯に笑顔で答えた。

夢見の家 出会い1（後書き）

威、かなりナーバスになっています。

義兄は異世界に置き去り、妹の命は風前の灯火。これで暗くなるな
といふのは酷かもしれません。

夢見の家 出会い2（終）

由宇香の容態が悪くなったのは、病室を訪れて暫く経ってからだった。

もはや日常茶飯事となりかけている突然の発作、ナースコールを呼ぶと駆けつけてきた医者と看護師に病室から出された。

「それじゃ、俺は中庭の方についてます」

暫くは出来ることも無くて立ち尽くしていた威は、入院患者の家族のメンタル面をサポートするスタッフにそれだけ告げると病室を後にした。

心配そうにしていた彼女だったが、今はそつとしておくほうが良いと判断した。ただ、緊急の場合に、すぐに家族と彼を呼び出せるようにするために病室の前を残ったのだった。

威は中庭に辿り付くと、人目につかない茂みに入った。

今は誰の顔も見たくは無かった。誰にも顔を見られたくは無かった。ここからは由宇香の病室の窓が見える。忙しなく動く看護婦の姿が、妹の容態の悪さを示しているようだ。

（頼む、神様。俺から由宇香までも奪わないでくれ）

威は祈るように空を見上げた。

雲ひとつ無い青空、それなのにそれは遠すぎて、彼の祈りなど聞き入れてくれそうに無い。

彼は一つ溜息をつくくと、静かにその場に寝転がった。

がさり・・・・・・・・

不意に自分が入ってきたのとは別の方向の茂みから音がした。

威が不信そうにそちらへと視線を動かすと、一人の少女が驚いたようにこちらを見ていた。

「うわ、先客がいたんだ」

少女も一人になりたかったのだろうか、先にいた威の姿に小さく声をあげた。

見ると不思議な少女だった。

日本人とは思えないような薄い肌の色、ビスクドールのように整った容姿に、まるで春風にきらめく新緑のような美しい瞳が飾られている。シヨートの髪は明るい栗色で、可愛らしい容姿にとても似合っていた。

「ええつと、あー、遠慮したほうがいいかな？」

少女は威の方をみながら、居心地悪そうに訊ねてくる。

どうしてだろう、と見上げてくる威に少女は頭を掻きながら、苦笑してみせる。

「だって、泣きに來たんでしょ？そういう時って一人になりたい人多いから」

彼女はそう告げると、威の傍でしゃがんだ。

それから、すっと右の人差し指で威の頬をつん、とつつく。

「それとも、僕の胸でよければお貸ししましょうか？『少年』くん？」

からかい口調ではあるが、少女の気負いのない言葉に威は小さく頷いて見せた。

「そう？じゃ、貸してあげるよ」

少女は笑いながらそういうと膝立ちになり、まるで外界から隔離するように威の頭を自分の胸で包み込んだ。

小さな手はまるで威を慰めるように静かに静かに頭を撫でる。

目頭が熱くなるが、それだけで涙は一向に出てきそうもなかった。

「ついでだから、子守唄でも歌おうか」

威が泣けないことに気づいた少女は、きゅっと彼の頭を抱きしめながら静かに子守唄を歌い始める。シューベルトだっただろうか、理

のようにクラシックには詳しくはないがどこか聞き覚えのあるメロデーで「眠れ、眠れ、母の胸に」と繰り返した。静かに目を閉じる。

長らく訪れていなかった安息の空気に、忘れていた睡魔が威を襲う。うつらうつらとしてきた威に少女は静かに語りかける。

「おやすみなさい、威くん……君の義兄おにいちゃんとは違う世界からでも君をずっと見守ってるよ」

(？……)

どうしてそれを、と思いつつも強い睡魔は彼を深遠の眠りの淵へと導く。

(起きてから……聞けば、いい……か)
威はそう思いながら意識を手放した。

「ん……」

義兄おにいを離別なくしてから初めてと思える深い眠りから覚めると、そこはすでに夕闇に包まれていた。

あたりを見回してみるとすでに少女はなく、その代わりに洸野が威に寄り添うようにしながら眠っていた。

「あ……威、起きたのか？」

浅い眠りだったのだらう、威が見回したときの振動で目を醒ました。洸野は瞼を擦りながら上半身を起こすと、まだ寝転んだままの威を静かに見下ろした。

「よく、眠ってたな……」

ほんの少し安堵の混じったその言葉に威は不思議そうに視線を上げる。

「だって、あれ以来、お前あんまり眠ってなかっただろ？だから、すごい爆睡してるのみて驚いた」

苦笑している洸野に威は少し後ろめたさを感じた。

『地球世界を頼む』

義兄は別れ際にそう頼んだのに、自分自身が彼を、両親を、悲しませている。

戻す術が見つからないと、嘆くのはまだ早い。それにすぐに見つからなくても、やっておくことは山積している。

「ごめんな、山下」

急に殊勝になった威に洸野は目を見開いたが、すぐに今度は彼らしい自愛に満ちた笑顔を返してくれた。ピアノを嗜む山下の大きな手が頭を撫でる。

「そういえばさ、お前がここに来たとき、そばに天使みたいな女の子いなかったか？」

頭を撫でられて思い出した。

そういえばあの少女は自分を知っているようだった。緑色の瞳、柔らかい笑顔、たぶん、彼らよりも若いだろうその少女に威はまた会いたかった。

会って、眠りへといざなってくれた事へのお礼と、疑問を投げかけたかった。

「天使、ねえ」

威の言葉に洸野は複雑そうな表情を浮かべると、「外見だけならそう見えるか」と小さく呟いてみせる。

「山下？」

「俺には悪魔の傍で眠りこけてたように見えただけだな」

嘆息しながら告げられた言葉に盛大な疑問符を飛ばしている威に洸野は「がんばれよ」と慰めるように肩を叩いてから立ち上がった。

威が彼の言葉の真意を知るのはそれから数週間後のこととなる。

夢見の家 出会い2（終）（後書き）

欠方ぶりのup過ぎて、前にどういう風に書いたのか思い出すのが大変すぎて四苦八苦の文章になってしまいました。

ももとの文章が威の一人称のために今回三人称の視点で書くとき、どうしても呼び方を間違えそうになりました。

とりあえず、出会い編はこれにて終了。

少女の招待は次回の『夢見の家 回想』に持ち越しです。

夢見の家 回想1

やりきれない思いはいつでも心の奥底に残っている。

自分の無力さを思い知らされたあの初夏の日 消化できない
追想はあの時から凍り付いたまま、溶ける気配さえ感じさせない。

この頃、夢見が悪かった

麻樹威^{あさぎたけ} 十六歳・初秋

9月も終盤を迎え、幾分か夏の暑さも落ち着き、少しづつ肌寒さを
覚え始める。

そろそろ衣替えの時期だなあ、とうつらうつら考えながら、威はか
つたるい英語の授業を受けていた。

変にアクセントのある教師の声は質が悪いBGMにしかない。

本日幾つ目かの大欠伸を、辺りに憚^{はばか}らずしてみせながら、彼は窓の
外へと視線を向ける。

照り付けて来る陽射^{やうせき}しは夏の攻撃的な部分を潜め、心地よい暖かさ
で彼を眠りへと導く。

(最近、すっかり眠れないからなあ)

彼自身、原因は判っている。

どれだけ深く眠っている積もりでも、夜中に何度も『夢』に叩き起
こされる。

それがために昼間に眠くなってしまう。そんな悪循環だ。

「私の授業はそんなに詰まらないのかしら？」

いきなり現実へと引き戻す声に威は後ろにすっ転びそうになる。

教室に意識を戻すといつの間にか隣りに来ていた女教師が青筋をた
てながらこちらを見下^{みおろ}していた。ヒステリー^{まなじり}気味につりあがった眦

には獲物を見つけたような剣呑な光が宿っている。

「スタンダアアップ、ミスタ麻樹。質問の回答は？」

発音的に少し難のある言葉で彼女は威を立たせると、彼女はにやりと笑いながら自分より背の高い威の顔を覗き込む。舌舐めずりの音さえ聞こえそうなその視線に、威は面倒くさそうに教室に備えてある時計に目を向けた。

時計の針はすでに授業が後僅かで終了することを示している。

（あー、面倒くさい……このままだと、放課中までこの金切り声の餌食かよ）

はつきり言っただけの結果はあまり好ましくない。

威は仕方なく肩を竦めて見せると、人を魅了するような視線で目の前の女教師に笑いかけた。

「はい、って言って困るのは先生だろ？」

義兄・理と幼馴染・月路恵吏が学園が居なくなった後、この学年で学業のトップに立っているのは威自身と、後もう一人の幼馴染の山下洗野だ。

更に言えば、威はこの学園の副理事長の息子だし、理事長とも懇意であることは学園の誰もが知っている所だ。

そんな彼に『教師としての能力に疑問がある』などと言われたら学年の途中であろうと教科担任から外される可能性も棄てきれない。理事長・副理事長の性格をきちんと理解していればその可能性の低さはわかるだろうが、彼女にはそれが本気の脅しのように感じられた。

途端に女教師は顔を赤黒くさせ、口をぱくぱくさせながらも反論すべき場所を探し始めた。

「だからって……その、あまり……あくびは」

勢いをなくした教師の声に威は無償に苛つきを覚えながら、ばんっ！と机の上の教科書を叩いた。

「授業を聞かなくてもテストの点数さえ稼げばいいでだろ？こうしていることはすでに時間の無駄です。聴く必要の無い俺に構わず、

授業を進めてください」

いつもの彼らしからぬ険のある言葉に教室がざわめいたが、威は全く気にせずそのまま教師の許可も得ずにどかりと椅子に座ってみせた。

ふと視線が前をみると洗野が心配そうに威を見ていた。その視線には「やりすぎだぞ」という言葉も含まれている。

その視線に跋があるそうに視線を逸らすと、未だ固まっている女教師に最後の言葉をかけてやる。

「まあ、このクラスに貴女が必要かどうかは本当に疑問ですけど」
威たちの学園は成績順にクラスが決められている。成績上位者の集まるA組から始まりG組までは1年生は入試の点数、他学年は学期末+学年末のテストの合計点数が多い順から振り分けられていた。このクラスはA組である。このクラスに居るだけで彼らはかなりの特待が受けられるため、他の私学に比べても優秀な人間が集まっていた。

そんな人間に対してヒステリックが武器なだけの彼女ははっきり言っただけの長物である。

最初は彼の言葉の意味が解からなかった彼女だったが、急激にその意味を理解すると顔を真っ青にして手を振り上げた。

キンコンカンコーン……

その瞬間にあわせたように授業の終了を知らせるチャイムが響いた。「きりーっ、れー。ありがとございましたー」

それを見越した学級長のなかがわのぶる中川透が教師を無視し、さっさと授業終了の号令をかける。他の生徒たちもまるで何もなかったかのようにそれにあわせて「ありがとございましたー」と適当にあわせた。

まるでクラス全員に馬鹿にされた状態になった彼女は悔しさに顔を真っ赤に染めると、駆け足で職員室へと帰っていった。

威は小さく溜息をつく、未だ心配そうにしている洗野の視線を無

視して情眼をむさぼるために机に突っ伏した。

夢見の家 回想1（後書き）

前の出会いの話から1月後ぐらいの設定です。

威の性格が何か悪くなっています。理由はまた後で出てきます。

威たちの通う学校は全部で20クラスあります。

物語中にあつたようにA～Gまでが成績順。

H～Jクラスは寄付金のあるクラスで家柄や企業規模等を鑑みて決められます。

K～Mまでがスポーツ特待等のクラス。

Nは芸能クラス。

O～Qが音楽科、R～Tが美術（芸術）科。

企業資本が入っている巨大なマンモス校で幼等部～大学院までの一環教育を行っています。

夢見の家 回想2

瞼を下ろすと懐かしい思い出が脳裏に蘇る。

『今のはやりすぎだぞ。幾らいけ好かない人間が相手でも八つ当たりするよくない』

夏休み前、威が先生相手に問題を起こすと苦笑しながら義兄は話し掛けてきた。

だいたいその後ろには理の親友で幼馴染の洗野が『理が言える立場か?』とばかりに笑いかみ殺していた。

『威の言い方は直接過ぎるんだ。もつと遠まわしに、だがぐうの音も出ないぐらいの言葉じゃないとまた同じことが繰り返されるだろ』
『俺、理みたいに性格悪くなれないし……』

的確なのかそうでないのか微妙な指摘に威が反論すると理の口元がひくりと引き攣った。洗野に至っては笑いを完璧には押さえることが出来なくなり、肩を震わし、腹を抱えながら身悶えていた。

『お義兄ちゃんにそんなことを言う口はどの口かな?』
理はそんな洗野を一瞥した後、生意気な義弟の頬をむにいつと摘んだ。

『ひはい、ひはひつう……』

当たり前前日常、当たり前前の風景。

いつまでも、いつまでも続くと思っていたそれらは、今では遠く昔の過去のようにも感じる。

「あつれえ?威ちゃん、お眠なの?」

楽しい思い出をかき消すように現実の声が頭上より掛けられる。軽々しく肩を叩かれて、威は不機嫌な表情丸出しで身を起こした。

威の目の前にいたのは余り見かけない少年がたっていた。

(確か……隣のクラスの)

威は自分の記憶を辿り、彼の名前を思い出す。

そうだ、B組の谷口とかいう人物だ。お調子者で目立ちたがり屋、自分が物事を中心に近づくためなら他人の迷惑など顧みず付きまとうような人間だったはずだ。

(そういえば、こいつの親、内のグループで重役やってたっけ)

巨大な企業体である麻樹グループコングロメイトは会長であり威たちの母である麻樹実を中心コアに複数の企業を抱える。そのうちの一つの常務か、専務が谷口の父親だったような記憶がある。

そんなことをつらつらと思い出しながら威は目の前の人間に視線を投げかける。

その視線に勘違いをした谷口は満面の笑みで威に話し掛ける。

「さっきの騒ぎ、隣まで聞こえたぜ！やっぱ麻樹はすごいなあ、あのイヤミ満開の英語の安部が悔しさ満開で顔青くして帰ってたぜ」

何処かおかしい日本語を半分の思考力で聴きながら、威は目の前の人物の心を探ってみる。

彼は威がしたことをまるで自分の手柄でもあるかのように教室全体に響く声で離し続ける。トイレから戻ったばかりの委員長の中川はそんな男の存在にあからさまに顔を曇らせた。どうやら谷口の存在で威の機嫌が更に悪くなることを予測しているようだ。

「お前のやることって本当に格好いいよな。さすが俺の親父の会社を束ねる一族の跡取ってだけあるよな。そういう威厳いげんっていうのが滲み出るんだらうな」

意味の無い言葉の羅列に、威の顔から段々と表情が消えてゆく。

教室の隅で中川が「あちゃあ」と頭を抱えながら辺りを見回し、洗野が教室内に不在であることを確認した。彼は自分の恋人である篠川奈月に耳打ちするように彼女に洗野の行き先を尋ね、彼女も困った顔をしながら事の顛末を彼に囁き返す。

そんな二人の様子を威は目の端に収めながら、目の前でぴーちくぱーちくと煩く喋り続ける九官鳥のような少年へと冷たい視線を送る。

「ところで、何か用か？」

いつまでもここに居られれば居眠りする時間が無くなる。折角、いい感じの夢を見ていたのに、こいつのせいでだいなしだ。

だが谷口は不機嫌だとありありと示している威の様子に気付く事無くにへらつと笑って見せた。

「えー？用事って、俺と君との仲じゃない。用事なんか無くても遊びに来るよ」

いったいどんな仲だよ……と、教室全体で無言の突込みを入れる。威に至っては胡乱うごんな瞳まなこになっている。

「いったい、いつから俺とお前がそんな『仲』になつたんだ？」

当然とも思える問いを威は声に精一杯の怒気を込めて投げかけた。

その時になってやっと威の不機嫌さに気付いた谷口は、どうして彼が怒るのか本気で解からないとばかりに更に空っぽな笑顔を振りまく。

「それは、そう……夏休み明けてからだよ。お義兄さんが行方不明になって、やっぱり家柄の近い人間が傍にいて慰めるほうがいいと思つて」

どんっ！！

谷口の言葉を遮るように威の拳が机に下ろされる。

教室が一瞬にしてしんつと静まり返った。

夢見の家 回想2（後書き）

威、真剣に怒っています。

洸野は威が普通に眠っていると思って『ある人物』の所へといっています。

ちなみに中川透・篠川奈月は威たちと幼等部からの付き合いで幼馴染的な要素も持ち合わせています。

夢見の家 回想3

小等部からの持ち上がりが多い所為か教室内の視線は谷口への批判に満ちていた。

「へえ……同じ家柄の、何、だつて？」

殆ど記憶の片隅にも残らない人間に一番触れられたくない部分に触れられ、威は声を一段と低くした。この時分になって己の発言の拙さに気付いた谷口は助けを求めるように周りに視線をさ迷わせた。

「谷口……だつて？」

「な……なんだい？」

威は静かに立ち上がり谷口の胸元をぎりりつつかみ上げると、最上級にどすの籠った声で宣言した。

「今度、俺に気安く話し掛けてみる、この学校にいられないようにしてやるからな」

その言葉を終えると同時に彼は手を離れた。

殆ど腰の抜けた状態の谷口はがたがたと机をなぎ倒しながらへたり込むと、脅えた瞳で威を見上げる。そしてその怒りが真剣だと読み取ると保々《ほうほう》の体で教室から飛び出していった。

そんな谷口の姿を威は何の感情も籠ってない瞳で見送ると、徐に自分の机の中の荷物を鞆の中に詰め込み始めた。

ある程度必要なものだけ詰め込み終わると、彼は自分の隣にある窓枠に手をかけた。

「中川、悪いけど、俺、早退するから」

「え？あつ！おいつ！威っ」

中川が状況と言葉を理解しきる前に、威は窓の外へと身を躍らせるのと近くにあつた木に飛び移った。そのまま上手に枝を手繰り地面へと着地する。階下にある下駄箱へと走りこみ、靴へと履き返ると威は抜け道を使ってエスケープした。

「だああっ！山下にどうやって説明すりゃいいんだああっ！」

学級委員長・中川の叫びを教室中の人間が生暖かい哀れみの視線で見守っていた。

「えっ？早退した？」

教室に帰ってきて威の存在が居ないことを訊ねてきた冨野に中川は渋々ながら状況を説明してやる。

「……と、いうわけ。ただでさえナーバスなあいつに止め刺してくれたお馬鹿さんが隣から来やがったんだよ」

中川はむっつりとした表情を隠そうとせず、その場にいなかった冨野を責めるように視線を向けた。

「なんで、そんな奴が来たのに止めなかったんだ？」

「トイレから戻ったらすでに始まってたんだ、俺の責任か？」

冨野の陶然の問いに中川は更に視線を胡乱にした。

「そいつが逃げ出した後、あつと言う間に鞆もって窓から逃亡しやがったんだ。まさか、それを追いかけるとか言わないよな？」

温厚を売りとしている中川の『どうすりゃよかったんだよっ！』という視線に、冨野もこれ以上彼に文句を言うのをやめる。

とりあえず冨野は自分のすべきことを考え、自分の机まで戻ると威がしたのと同様に必要な物だけを鞆に詰め込んだ。

「とりあえず追いかけるから、後、よろしく！」

その言葉だけ残し威と同じ方法で地上に降りていく冨野の姿に、中川は諦めたように声をかけた。

「お前も、早退で良いんだなっ！」

「さんきゅ。ついでに生徒会長たちが来たら、この状況だけ伝えておいてくれ」

地上に降りた冨野は3階の窓を見上げてお願いすると、足早にその場から去っていった。

教室に取り残された中川は肩を落とすと、重く溜息をついた。

「絶対、やめてやる。来学期になったら学級長なんてやめてやる。」

こんなんじゃ、胃がもたない」

「すいませんねえ、中川くん」

怨阻えんそめいた呟きに答える声に、彼は思わず顔をあげた。

そこにはいつの間に着たのか、このクラスの教科担任である威の父親・麻樹良弘あなきよしひろが申し訳なさそうに笑いながら佇んでいた。

「あの二人の早退願は私が出しておきますので、中川君は生徒会長たちへの伝言の事お願いしますね」

彼はそう告げると自分の持っていた出欠表に容赦なく欠席の文字を書き込んでいた。

「あ、号令！」

どうやら授業が始まる時間だったようだ。

中川は慌てて自分の机に戻ると手馴れた口調で号令を掛けた。

「それでは授業を始めますが、その前にこのクラスだけの試験の告知です。次の授業で試験を行います。赤点の者は容赦なく居残りで授業を受けてもらいます」

笑顔で告げられた容赦の無い言葉に、クラスからブーイングがあがる。

しかし、良弘はそれを余裕で受け流すと、笑みを深めてこう繋げた。「範囲は今日、今から教える部分のみ。問題も答えも全部書きますので写し逃しのないようにして下さい」

その言葉に、教室全体が豆鉄砲を喰らったように静まり返り、その後噴出す音が響いた。

「もちろん、勝手に学校を早退する人間には範囲も試験のことも教えてはいけませんよ」

「はいっ」

にやりと笑った良弘にクラス全体が同様ににんまりと笑って返してみせた。

夢見の家 回想3（後書き）

威・逃亡です。冨野も、逃亡です。何気に学級委員長と父親が怒っています。

3話まで行っているのに物語が序盤から動きません。というか、次の話まで起承転結の『起』の部分になります。ついでに捕捉。普通は自分の子供の教科担任に父親がつくことはないですけど、この学校は生徒の能力の順でクラスが分けられるように、先生達も試験を受けて上位者から上位学力のクラスの教科担任になるので、こんな変則的な状態になっています。

夢見の家 回想4

威が屋敷に入ると弁えたようにメイド頭の神木美智子（この美みちこ）が出迎えてくれた。

その後ろには若いメイドが数人、深々と頭を下げている。

「お早いお帰りでしたね」

「うん、早退エスケープした」

申し訳なさそうにいう威に美智子は穏やかな笑みで答える。

「良弘様からご連絡がありましたので、存じ上げております」

その言葉に威は英語の次の授業が父親の受け持ちである化学であることを思い出した。

（まずかつたかなあ……）

後悔してみても今更遅い。が、それもしかたないかと思い、威はずんずんと自分の部屋へと向かって歩を進めた。

「母さんの今日の予定は？」

「たぶん、夜遅いかと……」

最近、母・実（みのる）は何かに取り付かれたように仕事をこなしている。なんとなくその理由も察知できるので威は文句も言わずに「そう」とだけ返した。

「それじゃ、俺、部屋にいるから……」

彼はそれだけ言い残すと足早に二階へと続く階段へと向かった。階をあがると幾つものドアが並んでいる廊下にする。

その一つ、自分のものとは違うが見慣れたドアへと威は足を向けた。義兄・理（あに）の部屋。そこは彼がいなくなった時のまま時間が止まったかのように何も変わらない状態で保存されていた。

掃除もきちんとして行き届いており、整理整頓されたその様子に今にも理が戻ってきそうな感覚さえ与えてくれる。

威は床に自分の鞆を放り投げると、落ち着いた色で纏められたベッドに腰をおろした。

サイドテーブルへと視線を向けると、そこには見慣れた写真があった。確か去年の自分たちの誕生日の際に全員で撮ったものだ。手にとつて見ると懐かしい笑顔がこちらを見ていた。

「理……由宇香……月路」

写真を指差しながら今はここにいない人物の名前を呼ぶ。

写真の中には威や冨野の姿もある。今とは段違いなぐらい明るく、悩みも感じさせない笑顔。実際、それほど大きな悩みなんて持っていなくて、ただ連綿と続く幸せを甘受していた。

（全てが楽しかった。みんなみんな、いつも笑ってた）

写真を何度もなぞりながら考えた言葉に、威は苦笑した。すべてが過去形だ。

「理……この間、由宇香が逝ったよ。最期までお前に会いたがってた」

幼い命は、長らくの闘病も虚しく散ってしまった。

「月路がね、『日本に帰りたいけど帰らせてもらえない』って泣いてた。あいつが泣くなんて、どれぐらいぶりかな」

自分たちはただ5人一緒にいらればそれだけで幸せだった。

それすらも、今では難しいことになっている。

まずは、父親の都合で月路が……そして、あの初夏の日の出来事で理が……そしてこの間由宇香が次々にここから引き離されてしまった。

「俺も、お前に会いたいよ……どうすれば取り戻せるのかまだ全然手がかりすら見えないんだ」

咳かれる、寂しい現実。微かに唇が震える。

目じりにたまった涙は、堪えきれずに珠を結んで頬を転がり落ちた。「俺一人に戻っちゃったよ、この家の子供は」

幼い日、自分しかいなかったこの家。忙しい両親に甘えることも出来ずに我慢していた日々。そこに理が来た。少し距離をおいた友人だった冨野は理との関係の中でどんどん身近になって、そして3人で月路を見つけた。それからまもなく、由宇香も生まれて……。

昔に戻ったのだと諦めきれほど、威は強くなかった。

「ちゃんと、手の中に全部あつたはずなんだけど、なあ」

威は手にしていた写真をサイドテーブルに戻すと、止まらない涙を隠すようにベッドへと突っ伏した。

「どつすれば、取り戻せるのかな……」

繰言くじごのようになど呟つぶきながら、威は眠りの淵へと落ちていった。

夢見の家 回想4（後書き）

やっと序盤が終わりました。威は泣き虫になっています。

由宇香は病気が原因で亡くなっています。心労もあつたかもしれませんが、もともと寿命がそこまでしかない設定です。

本当は『回想5』までupする予定でしたが、半分以上を打った時点で保存したところ、失敗して消えてしまいました。あうううう。このノート、調子悪いから。

また、気を入れなおして打っていこうと思います。

夢見の家 回想5

麻樹威あさぎたけ 十六歳・初夏

あの忘れられない運命の日、威は義兄あに・理こととともに見知らぬ世界に飛ばされた。

いまだファンタジーのような生き物が残る世界の名は『キユスリア』
そこで彼らは一人の女性とであった。

さらりと揺れる美しく長い栗色の髪と新緑の美しい瞳、そして何よりも特徴的な大きな白い羽を持つ『天使デュファ』の巫女姫・エアルⅡセリシア。

自分たち兄弟のことを『王』と呼び、威がこの世界に戻るための道筋を導いてくれた彼女は、旅の最後でその命を散らした。

狂ってしまったメガリス・イルの暴走を一時的に止め、振り返った威の前に白い羽が降っていた。

大量に、まるでその向こうにいる義兄たちとの間を遮るように舞い散る羽。

それが自分たちをかばったエアルのものであると解かるのにそれほど時間はかからなかった。

幻影のように舞う羽は地面に落ちては溶け込まずにすうつと霧散してゆく。それが今失われてしまった彼女の命のように見える。

そして何よりも威に衝撃を与えたのは義兄の背に生えた一対の大きな白い羽の存在だった。

血まみれのエアルの死骸を抱きしめている彼の背中にはエアルが持っていたはずの大きな翼がその存在を誇示していた。

「ど……しっ」

大地に流れる彼女の長い髪は血に染まってどこか薄汚れていた。流れ落ちる大量の血液は大地に拒否されたように彼の足元に溜まってゆく。

初めて間近に見る人の『死』というもの。自分たちもエアルたちも無事に、絶対に無事に戻れると思っていたのに、これはどういこうとだろう。

（俺が……俺が、イルの暴走を止めるのに手間取ったから）
自責の念が激しく身体を貫く。

自分のせいで、彼女は命を落としてしまった。
自分のせいで、彼はあんな姿になってしまった。

びきっ………何か内側から壊れる音がした。

それに附随するように外側からカシャン……カシャン………と何か外れていくような音がした。

自分たちへと呼びかける声がある。

一部だけ正常に戻ったイルの発する焦りの声、それを意識の淵で聞きながら威は自分たちを攻撃し様としているメガリスの防御システムを見上げた。

「あ………あああっ！」

未だ、自分たちを攻撃するために力を貯め始めた水晶それに自分の枷が外れていく。

ガシヤガシヤガシヤガシヤ……ツバキツバキバキツ

閉じられていた扉が一気に開き、光の本流が威の身体の奥から放出された。

その光は四方八方に放たれながら、自分たちを攻撃しようとする水晶を粉々に砕いていく。

やがてその全てが打ち砕かれると、今度はその場に存在している自分以外の人間へと……一番近くにいた理へとその牙ちからを向けた。

だが目の前の彼は勢いが増した威の力を振り払うように一蹴すると

混乱したままの彼の身体を渾身の力抱きしめた。

「なんで……んで……」

威は泣きじゃくるように優しい理の肩口に頭を押し付けた。

こんなことになるなら、自分たち二人でこの場にくればよかった。自分たちだけならば、絶対に犠牲者など出るはずもなかったのだ。

威は縋るように理の背中に手を回す。その指先に本来ならばありえないもの……白い羽の付け根が触れた。

それは不思議なことにシャツを擦り抜けて生えており、まるで元から存在あることが当たり前のように存在を誇示していた。

「威様……理様……」

慰めてくれる理の背後からおずおずとした青年の声が自分たちを呼びかけた。金色の髪の森の民・リデルはまるでかけがえのない宝物でもあるかのようにしつかりと彼女の遺骸を胸に抱いて自分たちの方へと近づいてきた。

威は慰めてくれる理の腕をはずして貰うと、リデルの腕に収まっているすでに事切れた彼女の姿を確認した。

エアルの体は傷だらけだった。それなのに、顔は傷ひとつなく驚くほど綺麗だった。それが痛ましさを倍増させている。

威の横に立つ理はその姿をただ黙って見つめていた。

感情を写さない瞳、泣き叫ぶこともできない心。もしかしたら遙か昔のトラウマがまた彼を苛んでいるのかもしれない。

沈黙が瞬間、自分たちを包んでいた。

『早く、私ノ中へ……防衛装置ガ復旧シマス』

しかしその沈黙の時間も長くは続かなかった。焦りを示したメガリスの声に理は決断した。彼はリデルを水晶メガリスの防衛システムの範囲外へと出るように指示をすると威のほうに向き直った。

「威、行こう。エアルの開いてくれた道だ」

理の発した決断の言葉に威は小さく頷いてみせた。

夢見の家 回想5（後書き）

本編『至空の時』の第24話『散羽』の部分のリライトです。本編は理視点よりなので、こちらは威の視点よりです。

もともと威の一人称で書いていた文章だったので書き直すのにだいぶ時間がかかりました。

まだまだ回想シーンが続きますので少し生暖かい眼で見守ってください。

夢見の家 回想6

メガリスの中は一個の確立した空間だった。

通路を構成する石壁にはすべて柔らかな光を発する石が使われており、ただひとつの部屋まで一直線につながっていた。

部屋は祭壇の間とでも呼ぶべき内装になっており、外にある石柱とは比べ物にならないほどの輝きを放つ巨大な紫水晶が中央でその存在を誇示していた。ただその巨体には何かが決り取られたような後がむごたらしく残っていた。

そしてその部屋の隅にはこの部屋にあるのが不思議なほど異質な、真っ黒な石が部屋の端と端、向かい合うように置かれている。オニキスにも似た黒色の石の表面は鏡のように磨き上げられており、紫水晶とそれとの間にたつ二人の姿をしっかりとその表面に映し出している。

『道ヲ見ツケニ来タノデスカ？』

その声は、外にいたときよりもずっと明確に二人の耳に届く。その口調は静かで、まったく狂いなど感じられなかった。

「あなたがたが主なる星と呼ぶ地球へ帰る道を見つけるためにきた」
理の言葉に水晶内の光が悲しそうに、だがその言葉を予測していたように緩やかに明滅した。

『ワカリマシタ、貴方ガソウ望ム以上、私ニ止メル術ハアリマセン』
少しの沈黙の後に発せられた言葉に威は違和感を覚えた。

本当に、『水晶』は狂っているのか？本当に狂っているのなら、通路など閉ざして、自分たちを帰す術など隠すのではないだろうか。無理も同じ考えなのか知りたくて威は視線を祭壇から義兄の顔へと戻した。その横顔はすでに威と同じ結論にたどり着いているように見えた。

『シカシ、私ノ能力ハ既ニ大半ガ失ワレツツアル……コノ世界ガ何者カニヨツテ狂ワサレタ時カラ、ソシテ『彼女』ガ心亡キ者に奪ワ

レテシマツタ時カラ……能力ちからノ汚染ガ始マツタ」

どこか達観した言葉で告げられる言葉に威は一抹の不安を感じ取った。

何かが拙い方向に向っている。それだけがひしひしと自分の上に伝わってきた。

「私ちからニ従ウ能力ハ後ワズカ……今ノ私ニハ一人ノ人間ヲ運ブ能力シカ残サレテイマセン」

贖罪をするように告げる「水晶かのじよ」の言葉に、威は雷に打たれたような衝撃を覚えた。

不安はやはり的中した。そして次に理から発せられる言葉も彼には予測がついた。

「威……お前が地球に帰るんだ」

元から……この結末を知っていたかのように、理は淀みなくその言葉を発した。

「エアルが、翼を残したということは俺がこの世界に残る未来を知っていたんだらう。だから……」

「やだ！絶対にやだっ！！二人一緒に帰るんだっ！理が残るっていうんなら、俺も残る」

理をこのままこの世界に残すわけにはいかなかった。

地球とは違い、「闇」の特性を持つだけで「狩る対象」となるような世界だ。更に最悪なことに彼は「闇王」としての力を持っている。こんな世界に彼を置いていけばどれだけの苦痛を味合わされるか予測がつく。

まだ「光王」としての自分なら迫害など受けない。なのにどうして、

「天使エアル」は彼に自分の羽を託したのだらう。

その心配を伝えようと、言葉にしようとするけど、威の口から出るのは「いやだ！」という単純な否定だけだった。

「義父さんや義母さん、由宇香を悲しませるのか？」

説得する理の言葉に、威の肩が小さく反応した。それを宥めるように義兄の手は優しく彼の頭を撫でてくれる。

「威が残るより俺が残ったほうがいい。順応能力だって俺の方が優れてるしな」

明らかな嘘に威は講義するように視線を上げた。

見上げるとそこには自分と同じように辛い別れを前に無理して笑っている理の顔があった。

「山下を一人にするのか？」

理はやっと自分とかち合った威の目をじっと見詰め、最後の札を切った。

誰よりも優しく、心に少なからず傷を持っていた威・恵史……そして、理の心を埋めてくれた幼馴染の彼を一人に戻すことなど自分たちにはできやしない。

洸野と一緒に暮らしている兄とその婚約者……もちろん残っている麻樹家の人間だって彼を慰めることに努力は惜しまないはずだが、彼が人に言えない孤独に苦しむことは自分たちが一番知っていた。

慰めてくれる人に『大丈夫』と笑って応えながら、心の中でずっと泣きつづけることを。

「やっぱり、理が帰ればいい」

確かに義兄と離れるのは寂しいが、威にはその方がいいように思えた。

夢見の家 回想6（後書き）

すごく久々の更新です。その上、『至空の時』のりライト部分をまだ抜けていません。

いや、抜けてないから異様に時間がかかってしまうのですが……ああ、言い訳がましくなっていく。

次の次くらいで『回想』部分を抜ければ、また『現在』の部分になるのもう少し更新が早くできると思います。

夢見の家 回想7

予測どおりだったのだろう、威の主張に対して理は背中に生えた翼を大きく動かしてみせた。

彼の背中に広がる白い白い翼は、すでに答えが出ていることの証でもある。

「こんな翼ものをつけて？」

「彼女エアルのようにしまっておけばいいだろ」

それでも、反論をしなくてはいけなかった。

継るように言い募る威に理は今度こそ重く頭を振って見せた。

「だめだな・・・絶対に何かしらの不備が出てくるはずだ・・・お前が帰るべきだ」

告げられた言葉を聞きたくなくて、威は耳を塞ぎ思いつきり頭を振った。

「条件を出そう」

そんな威の心を宥めるために、理は一つの提案を申し出た。

「威は、一旦地球世界に帰る。そして山下つきじや月路、それから威たちの能力の封印をしている良弘義父さんと一緒に俺を地球世界に戻す手段を考えてくれ」

そこで一旦、理は言葉を切った。

「俺もできる限り此方の情報を集めて、二度とこんなことが起きないようにした上で変える方法も探す。もちろん、自力で変える方法を見つけたら、即刻帰ると約束する・・・わかったか？」

(理はずるい……)

逆らえないような提案に威は下唇を噛んだ。もうこれ以上彼を困らせることは出来ない。

「わかった」

威は視線を少し落とすと、渋々その言葉を呟いた。

彼の承諾に理は優しく義弟の身体を抱きしめてやった。

「俺が帰れるまで、みんなを守ってやってくれ」
当たり前前願いに、威は何度も頷いてみせる。

5歳の時、理が麻樹家に引き取られてからずっと離れたことなど無かった。やがて大人になったら、道が分かれるかも知れないと思っ
てはいたが、それは『現在』^{いま}ではなかった。

(どうして、どうして)

威は何度も頭の中でその言葉を繰り返し、涙を流しながら理の言葉^{ねがい}
に頷きつづける。

だが、いつまでもそうしているわけにはいかないことなど威も理解
していた。何とか涙を自分の腕で拭うと、ゆつくりと立ち上がり祭
壇へと視線を戻した。

「水晶^{メカリス}……地球への扉に案内してくれ」

威の言葉に答えるように、水晶^{メカリス}は光る壁の一点から一条の光を黒い
鏡の様な石へと注いだ。

『扉八元来コノ世界ヲ創ツタ者ガ残シテクダサツタ……ソノ鏡二閻
マタハ光ノ力ノ干涉ガアレバ扉八開キマス』

威は心の揺らぎを悟られないように、まっすぐに鏡の石の前へと向
った。その歩調が少しゆつくりになってしまったのは、未だ、納得
できない心のためだろうか。

石に近づくことに先ほど目覚めたばかりの能力の欠片が反応して、
彼の身体は淡く紫色の光を放ちはじめた。そして呼応するように鏡
だった扉の石の闇が深くなり、あと一歩で辿り付くほどの距離にな
ると底知れぬ深き闇を内包する状態にまで変化していた。

威は決意の限りに自分の両手の拳を握り締めた。

「理……約束だから……絶対に俺は……俺たちは理を連
れ戻す方法を見つける」

決意が鈍らないように、理の方には振り向かず静かに静かに決意
を告げる。

「ああ、待ってる……俺も戻る術を探しながら、ずっと待ってい
る」

その言葉に何とか止めたはずの涙がまた溢れた。

威はそれを悟られないように深淵の闇を称えた石へと手を伸ばした。その表面に触れるかと思えた指先は何の抵抗もなく石の中へと吸い込まれる。

もう止められない。石に吸い込まれる力に任せて、威は最後の一步を踏み出した。

「地球世界のことは頼んだ」

「ああ、まかせろ」

背中に掛けられた理の言葉に、威は答えるように振り向いた。

自分の瞳に映る義兄の姿を忘れないように心に刻み付け、威は意を決して闇の中へと飛び込んだのだった。

夢見の家 回想7（後書き）

何とか連続でUPです。そして回想シーンも何とかおわりました。これでもう少し手早く更新できるはず。（と、言っても明日・明後日は自分の都合上更新は絶対に出来ないのですが）

夢見の家 回想 8

麻樹威あさぎたけ 十六歳・秋の夕暮れ

自己嫌悪 自分が目覚めて一番最初に威の頭に浮かんだ言葉だった。

(まさかこの年齢としになって泣きながら眠るなんて)

眠る前に来ていたはずの制服はいつのまにか脱がされており、代わりに威が寝巻きがわりに使っているスウェットに着替えさせられている。壁を見ると、予備用の理の制服の横に並べてかけられていた。(あれ……と、いうことは)

誰かに涙でぐしゃぐしゃになった自分の顔を見られたという事実に辿り着き、威は恥ずかしさのあまり顔を覆った。

こんなことをしてくれたのは誰だろう。この家に仕えている誰かが父……それとも、洗野が訪ねてきた可能性だつてある。

「だめじゃん、俺」

彼を一人にしないために戻ってきたのに、過去ばかりを振り返ってしまっていた自分は実質彼を孤独にしまっている。こんなことでは理に再会した時に呆れられてしまう。

「ごめんな、どんなことをしても連れ戻すと約束したのに、守るつて約束したのに、少し忘れかけてた」

自分の悲しみだけに目を向けて、守るべき少年を放つたらかしにしていた。

威は自分の情けなさを再確認しながら、視線を落とした。もう夕暮れ時が近いのだろうか、視線を落とした手元はオレンジ色に照らされていた。

もう、夕方なのか、と視線を窓の外に向けると地平に近づき大きく見える光を放つ球体たいだいがその色を白から橙へと変化させ、沈み行くところたいだいとしていた。

鮮やかなオレンジの光線は、温かく包むように世界を自分と同色に

染めようとしているようだ。

「そういえば、由宇香が好きだったよな」

温かな色に染まるこの瞬間を妹はとても愛していた。朝日が差し込むようにと設計されている彼女の部屋からは決してみることの出来ない夕陽を、妹は義兄（きぎょう）の部屋まで来ては鑑賞（かんしょう）していた。

『そんなに好きなら、部屋を替わろうか？』と理が申し出ると、彼女はくすくすと笑いながら『お兄ちゃんたちが揃っている部屋で見ると楽しいのよ？』と笑って答えたものだ。

その時は由宇香の答えの意味が解からなかったが、今なら理解できる。温かい光の中にあの楽しかった過去の風景が重なる。

それを取り戻すために自分は戻ってきたのだ。例えすでに由宇香はこの世に居ないとしても、彼女の好きだった風景を取り戻す義務が自分にはあるのだ。

威はぐつと拳を握るとベッドから降りた。

誰もいない部屋でこれ以上夕陽を見ていても仕方が無い。

自分のすべきことを探すためには、まず『異能力者』としてはスキルの高い父・良弘と色々相談しなくてはならないだろう。それからあの時に知り合った『リュウファ』という名前の風の子供や、それに何かを知っていそうな冨野自身とも話をしなくてはいけない。

「よしっ！」

もう一度、威は自分に気合を入れなおすと理の部屋を出て階下へと向った。

階段のところまで、威は一旦、立ち止まった。何故か階下が騒がしい。

（父さんが帰ってきたのかな）

この家の当主であり、巨大な企業体（「キングダムレット」）の長である母・実（みの）がこの時間に帰ってくることはまずない。

逆に父・良弘（よしひろ）は威たちの通っている学園の教師で、担任や顧問を請

け負っていないので早く帰ってこようと思えば、至極迅速に家に着くことが出来る。

(あれ……そういえば)

あの時は頭に血が上っていて考えていなかったが、次の授業は父の受け持つ物理だった気がする。

普段は温厚で優しい父ではあるが、単なる八つ当たりみたいな状況で授業をサボるのを簡単に許してくれるような甘い人ではない。

(と……とりあえず、謝っておかないと)

威が階段を折り始めたところで、メイド長の大森美智子の声が耳に届いた。

「奥様、だんな様、お帰りなさいませ」

その言葉に威は目を見開いた。これは珍しいこともあるものだ。何か用事が会って示し合わせて帰ってきたのだろうか。

威が驚きの表情を隠さずに階段を下りていくと、そこにはスラリとしたパンツスーツを来た実の姿があった。威は視線で母と一緒に帰ってきた筈の父・良弘の姿を探した。

夢見の家 回想8（後書き）

やっと現在に戻ってきました。

サブタイトルどおり、回想……自分で長かった気がします。

威も大分浮上してきました。後は止めを両親ならびに幼馴染こせに刺しやてもらうのみです。

夢見の家 回想9

(何を、やってるんだろ)

良弘は実の第一秘書をしている村野忠明むらのただあきとなにやら深刻そうに話をしていた。と、いつてもその顔には何やら温かい表情も見て取れる。「おや、早いじゃないか。馬鹿息子」

階段を下りてくる気配を読んだのか、実は階段の途中に居る威を見上げてにいつと笑って見せた。別に学生が帰ってくるのに早すぎる時間じゃない。きつと勝手に早退したことを、良弘に聞いたのだろう。だがそのことを責めるような言葉を彼女は発しなかった。

「早いのは母さんの方だろ。何かあったの？」

そんな母親の愛情を再認識しながら、威はぎこちなく微笑みを作りながら問い掛けた。

「……『何かあった？』はこっちの台詞だ。目が赤くなってる。また泣いてたのか？」

階段のすぐ下で待ち構えていた母親に痛いところを衝かれ、威はなんとか笑って誤魔化そうとした。

「今日は理の部屋のりで泣いていたそうですね。先程、美智子さんから報告を受けましたよ」

いつのまにか実の横にまで移動していた良弘にまで見上げられれば、威には逃げ場など無かった。

彼は大きく息を吐くと

「一度、気持ちの整理をしてたんだ」

と適当な返答をしながら階段の一番下まで降りた。

ここまで来たら、威よりも20センチは身長が高い良弘には顔を覗き込まれないだろうと踏んでのことだったが、彼は腰をかがめるとその大きな手で威の顔に残る涙のあとを拭ってみせた。

「気持ちの整理はきちんといつたのですか？」

良弘の言葉に威は少しだけ視線を落とした。確かに自分のすべきこ

との再確認はできたが、整理というまでには達していないように思える。

「焦りと短絡的な結論は禁物ですよ。余計に遠回りをしたり、すべきことができなくなったりしますから」

視線の動きだけで威の心を読んだのか、良弘はそれだけ言う視線を息子の顔から外した。

「それよりも、今日はお前に話しておきたいことがあるんだ」

良弘が威から離れるのを見計って、実は改まって息子に話し掛けた。威は突然の切り返しに、事情がつかめず、少し呆けながら両親を見つめた。

「あのな、大学病院の産婦人科で診察を受けてきた……」

母親からの突然の台詞に威は少し考えた拳句、ぽんつと手を叩いてみせた。

「更年期しょ……」

「まだそんな年齢じゃないっ！」
「げいんっ！」

息子の暴言に実は容赦なく頭を殴った。突然の攻撃に避けきれなかった威は、涙目になりながら「それなら何だよ？」と視線で母親に尋ねた。

「子供ができたんだっ！それぐらい察しろ！馬鹿息子！」

「はぁ……」

突然の宣言に威はその言葉の意味を飲めずに呆然と母親の顔を見た。そして少しの逡巡の後、今度は目を見開き、彼女の腹を指差した。

「はぁあ？えっ？どういう事？それって高まろ齡出産？」

息子からの度重なる不遜な言葉に実は再び鉄拳制裁を下した。

「よく覚えておけ、息子。マル高っていうのは35歳を過ぎた初産の女性を区別するための言葉だ。それぐらいで初産だといういろとりスクを伴う可能性が高いから、と国が決めたらしい。」

つまり私にはその言葉は当てはまらないという事だ」

年齢的には実もすでに35歳だ、該当はしている。だが16年前と

10年前に子供を一人づつ産んでいるわけだからこの条件には該当しない。

「あ、確かに俺や由宇香を産んでるから」

「そういうことだ」

納得している威に実は胸を張りながら答えてみせる。しかしその横で良弘と村野が大きな溜息をついていた。

「そうはいつてもリスクは少ないとはいえないんです。由宇香の時も体調を崩しましたし、威の時なんかは妊娠中毒症で入院まで余儀なくされたんですから気をつけてください」

良弘がそういうと追隨するように村野も言葉を継いだ。

「良弘様のいうとおりです。これからスケジュールを調整しますので、絶対に無茶しないでくださいませ」

大人二人の心配に、威は改めて視線を母親に向けた。それだけのリスクを伴ってまで、母が子供を作る理由がわからなかった。

確かに後とりである理は行方不明だが絶対に自分が理を取り戻すし、それにいざとなったら一時的に威自身が当主になる覚悟ももっていた。

実はそんな威の考えなど見透かしているかのようににんまりと笑ってみせる。

夢見の家 回想9（後書き）

母・実^{みの}の爆弾発言投下です。威に十六歳ほど年齢の離れた弟・妹ができてます。

このシリーズは、93年ぐらいに打った文章をリライトしていますが、こここの部分は当初打った文章が殆ど使えないために滅茶苦茶変更をかけた。第一、マル高の基準も当時とは違ってるので

夢見の家 回想10

鋭利な眼光の中に母の愛情を滲ませて実は言い聞かせるように威へと告げる。

「だからな、威……お前は一切、この家の事になど煩わされなくていい。お前はお前のすべき事に全てを集中させる。そうじゃないとうちの長男坊は戻って来れないだろ」

その言葉に威は視線をさ迷わせた。見ると、妻の横でずっと黙って見守っていた良弘も彼に向って大きく頷いてみせた。

「理があの世界に行ってしまうてからの威は我武者羅に道を求めすぎた挙句、八方塞になり、行く道も解からず、するべき事も忘れて抜け殻のようになってしまいました」

歯に衣着せぬ言葉に威はううっと呻く。

確かに……確かにそうなのではあるがもう少しオブラートに包んで言うて欲しい、と思わずにはいられない威であった。

「その上、理の役目まで引き受けようと経営学まで勉強し始めた時には、さすがに実の父親として息子の不出来さを呪わなくてはいけませんでしたね」

良弘の言葉にどんと威が肩身を狭くしても、誰も助け舟を出さない。つまり他のみんなも彼の地球世界に戻ってきてからの威の不甲斐なさに苛立ちを覚えていたのだろう。

「理はこちらに貴方を戻す際になんと言っていたのですか？」

確かめるように訊ねてきた良弘に威はつい先程夢で思い出したばかりの別れの情景を思い出した。

「父さん達と共に『道』を探して欲しい」

「一人でやれとは言ってませんでしたね」

確かに父親の言う通りだった。理は『みんな』で道を見つけてくれと言った。

そして『自分』もこちらで帰路を探すと言っていた。

「それから、みんなを頼むって」

頼まれたのに何もできていない。すべてを守るために広げた彼の手は、理が一人で担ってきた役割がどれほど重たかったのか実感しただけだった。

自分の手の小ささを再確認するように視線を掌に落とした息子に、良弘は大きな溜息をついてみせた。

「それは、理の役目を引き受けるという意味なのですか？」

父親の一言に威ははつと顔を上げた。

良弘の横にいる母親も息子の勘違いに思い至ったのか額を指先で押さえながら、頭を振ってみせた。

「お前がお前たち4人組の中で担っていた役目はなんだった？」

「え……？俺の役目？」

母親の問いに威は訝しげに眉を顰めた。

確かに威たち4人はいろんな行動を起こす時、抜群のチームワークを發揮していた。それもこれもすべて理と恵吏の立てた作戦があり、一番後ろに洸野が待っていてくれるから自分たちは好き勝手に行動が出来た。

「理の役目は先の先まで考えること、恵吏ちゃんの役目は理の思考のフォローと後始末、洸野君は他の3人を優しく見守り帰る場所になること。」

「じゃあ、お前の役目は？」

あの4人の中で自分に役目などあったのだろうか、威にはそれをも解からなくなっている。

そんな威の様子に両親は「しょうのない奴」とばかりに静か笑ってみせた。

「威の役目は率先して行動し、笑顔で導くことだろ」

然も当たり前のように答えを出した母親に彼は目を見開いた。

確かに4人が全員揃っていた時、特に全員で何かをしようとする場合はいつも自分は笑顔でいた。そしてそれに答えるように理は口角を上げてみせ、恵吏は目元だけで笑い、洸野は呆れながらも苦笑し

ていた。

自分の中に蘇ってきた懐かしい記憶に威は自然と笑みを浮かべる。そうだ、これは新しく自分達4人で行う『作戦』なのだ。理の指示はすでにあの『世界』^{キユスリア}で貰っている。それをフォローしてくれるだろうブレインは電話すれば繋がる場所にいる。そして自分はそれに従って動いて、『帰る場所』たる洸野の元へと再び彼を戻せばいいのだ。

「本当、呆れられても仕方ないよな……単純な事を自分で解かっけないなんて」

一人ごちる威の頭を良弘は優しくぽんぽんと撫でた。

夢見の家 回想10（後書き）

威、両親（実・良弘夫妻）に説教を受けてます。

この辺りは旧文章が余りにもな内容だったので、かなり打ち直しています。

そしたら異様に説教くさい父母になってしまいました。

夢見の家 回想 11

「とりあえず、次に威が一番すべきことは『彼』に謝ることですよ。良弘はそれだけ告げると威の頭から手を離し、やっと上へとあがってきた息子と視線を合わせた。

威は彼の言葉に深く頷くと「明日、学校で謝るよ」と父親に約束する。

一番、守らなくてはいけない相手を放っておいたのだ。誰よりも傷ついていても、その心をずっと隠してしまうような彼にきちんと謝らなくてはならないだろう。それは威が一番実感している。

「あの、よろしいでしょうか」

会話が途切れたのを見計ったように、メイド頭的美智子が威に声をかけてきた。その手には封筒に入れられた手紙のようなものを持っている。

「威さまが眠られた後、こちらに洸野さまがお見えになられました。いつも控えめに用件だけ伝えることが多い彼女にしては珍しく、何か厳しいものを含んだ物言い。彼女は言葉を続けた。

「部屋に戻られた威さまのことを伝えると、様子を見に行かれて…その後、しばらくしてから降りてこられたと思ったら『理の部屋で眠っていた、起きたらこれ渡してくれる?』と言い置いて帰られたのです」

日頃の洸野が他人には……自分を守る3人の少年とその妹、そしてこの家の当主夫妻にしか見せないような苦痛の感情の滲んだ笑みで告げられた言葉。よっぽど精神的に弱っているのだろう少年の様子に生まれたときから面倒を見ている威に対しての態度が自然と叱責口調になってしまっ。

「ごめん、美智子さん。それ下さい」

威もそれを解かっているのか素直に彼女に謝ると幼馴染からの手紙を受け取るうと手を差し出した。

彼女は少しだけ頷き、それを手渡すと「差し出がましい真似をしたか？」と当主である実に視線を向けた。実は苦笑を浮かべながら、自分が小さい頃から仕えてくれている古参のメイドに頷いてみせる。美智子はそれに微笑で帰すと、すつと頭を下げてその場を辞した。威はその様子を見送ってから自分の手の上にある洺野からの手紙の封を開けた。

『威へ』

理の部屋にあつたレターセットを借りて勝手に書いてみた。改めて手紙を書くことなんて無かったから少し緊張する。だけど口で言うのはもっと抵抗があるので、とりあえず手紙で。

いいかげんに、泣き止まないと理と由宇香ちゃんが悲しむ。

あの二人はお前の笑顔が好きなんだから。

いつも笑っているお前に癒されているって言っていた二人を悲しませる真似をするな。

だから、もう少し、前向きに……せめて、ほんの少しでも周りの人に心を開いて欲しい。

みんなが威の事を大切に思い、心配していることを思い出してくれ。

俺も、暗いまんまの威を見るのは辛い。

追伸・会わせたい人がいるから明日、登校したら生徒会室にくること

山下洺野』

洺野らしい少し朴訥な部分がある言葉で手紙は終始紡がれていた。

(自分の意見を最後に書くところなんて、本当に)

本当は自分だって傷ついているのに周りの人間のことを中心に伝えて、自分の心は最後にしか言わないそんな所も彼らしくて少し苦笑してしまった。

あの事件から今までだって、自分の心の痛みを一切出さずに、ずっとずっと威の心配ばかりをし『悲しみの感情』はすべて内に閉まっ
てしまっている。

いつもならそんな傷など威たち全員で表に曝け出して傷を癒していた。

だけど今回は威が先行して暴走し殻に閉じこもったせいで彼はいつもよりもしつかりと自分の回復しない心の傷を内々にしまいこんでしまった。自分が彼にそうさせてしまった事に彼は今更ながら深く反省する。

「俺って、本当に馬鹿……」

「なんだ今ごろ気付いたのか？」

「おや、今ごろ気付いたんですか？」

咳く息子の言葉に、容赦なく両親ふたりは笑ってみせた。その後ろでは流石に噴出すのは拙いだろうと必至で肩を震わせている村野や美智子の姿も見える。

「うううう……それじゃ早いところ馬鹿の汚名を返上するぞ」

威はそう宣言すると、理が居なくなる前までとはいかないが出来る限りの明るい笑顔で笑って見せた。

夢見の家 回想11（後書き）

威、両親に小馬鹿にされています。

二人とも深く落ち込んで行動できなくなる前に、次期策を考える人なので、うだうだと悩み続けている息子にいらだったのでしよう。とりあえず、さっさと威にいろんな方面へ謝罪させてこの話を終了前もって行きたいです。

夢見の家 回想12

翌日、いつもより早めに学校に着いた威は教室に洸野の姿がないのを確認すると、少しの逡巡の後、そのまま生徒会室へと向かった。1年ながらに生徒会役員をやっていた理や洸野とは違い、威にとつて初めて訪れる場所である。彼はごくりと唾を嚥下すると、ドアをノックした。

「はあい、どうぞ」

中から応えたのは可愛らしい少女の声だった。そういえば、前期から今期にかけての生徒会長は可愛らしい女性だと理が言っていた気がする。

威は一度だけ軽く深呼吸をするとガラリとそのドアを開けた。

「おはよう、威」

朝には滅法弱いはずの洸野が眠そうな雰囲気隠さなまま、扉を開けた威に挨拶をしてきた。

「朝に弱い山下が、きちんと朝から活動してるなんて珍しいな」

威としては教室に洸野の姿がないのはまだ来ていないだろうと踏んでいたのに、どうやら彼は威がいつ生徒会室を訪ねても大丈夫なように早くからここに待機していたようだ。

「もしかして、昨日から泊まってたとか？」

「お前、いつたい俺のことなんだと思ってるんだ？」

自分よりも早く起きて行動する洸野を信じられない目で見つめながら威が呟くと、彼は眠気も混じった胡乱な瞳で幼馴染を睨み返した。「で、掛け合い漫才は何時まで続くのかな？」

二人の会話を止めるように、先程、部屋に入る前に伝えてくれた声が響いた。鈴の転がるような可愛らしい声にはそこはかとなく笑いが含まれている。

誰の声かと威が辺りを見回すと、その人物は眠そうにしている洸野の後ろからひよこつと顔を出してみせた。

「あ……確か、君は」

現れたのは由宇香が入院している時に病院で会った少女だった。

万人が天使のようだと称えるだろう幼さの残る柔和な顔、その顔を包み込むように短めの栗色の髪がほわんほわんと揺れている。瞳は冴野と似た明るく綺麗な緑色……その奥には意志の強さを現すような光が見えた。

「ちよつと前ぶり？君のことは理くんや冴野くんからよく聴いているよ」

背の低い彼女は威に近づいてくると最上級の笑顔で彼を見上げてきた。

やはり天使みたいだ、と威は改めて実感した。それにしても同学年にこんな可愛い女の子が居れば、気付きそうな気がするのだが……どうやら見落としていたようだ。

「この学校の生徒だったんだ、知らなかった」

見上げてくる少女に向けて、彼が正直にそのことを告げる。すると彼女は暫しきよんとしてから盛大に噴出し笑いをしてくれた。

「あーははははははは、苦し……ナイスだよ、威くん。高等部の生徒でその大ボケをかましてくれるのは君ぐらいだ！」

苦しそうに笑う彼女の後ろではこれまた冴野が肩を震わせながら机にうつ伏せている。どうやら今の発言は彼の笑いの壺にも嵌ったようだった。

（そんなに有名な人物なのか？）

彼女だけが自信を持っているのではなく、冴野すらそれを認めているということは、それなりに彼女は高等部で名の知れた人物なのだろう。

（あれ、そういえば今期の生徒会長って女の人だったけど……）

目の前の人物はどう見ても自分より年上に見えない。下手すれば中学生でも通るのではないだろうか。

「改めて自己紹介するね。僕は御園裕穂。風原学園高等部現生徒会

長様だよ」

小柄の割にはそれなりに発達している胸を大きくはりながら、少女はにんまりと笑って見せた。

がらっ……

「自分の役職に『様』をつけて紹介するのはある意味サムイぞ」

生徒会室のドアが開くと同時に声優張りの低く通る声が高い位置から裕穂の台詞に突っ込みをいれる。

「じゃあ、剣人けんとには副会長様様とつけてあげよう」

裕穂が楽しそうに答えるのを横目に見ながら威が振り返ると、そこにはとても背の高い男子生徒が立っていた。身長は2m近くあるだろうが、威の中で『背の高い人物』のイメージでもある父・良弘よりも背が高いように見受けられる。そして顔立ちは……

(なんとなく、山下に似てる?)

でも、威が理解している範囲では洸野は一人っ子のはずだ。

ぽかんとなんとも間の抜けた顔で見上げてくる威の様子に彼は苦笑しつつ洸野に視線を向けた。

夢見の家 回想12（後書き）

天使（？）との再会です。ちなみにこの天使は周りには『小悪魔』『魔王』『恐怖の大王』と呼ばれています。彼女の天敵は理ですが、今はないので仕掛けし放題で暗躍してま

後、2〜3話ぐらいで話のめどがつきそうです。

夢見の家 回想 13

「まだ、俺のこと、彼に教えてなかったのか？」

彼がちらりと威を視線で示すと、冨野は剣人と同じように苦笑しながら頭を掻いてみせた。

「えっと、とりあえず、剣人兄さんが着いてから説明した方がいいからって、裕穂さんが」

その言葉だけで納得したのか、剣人は「はああっ」と大きな溜息をついて威へと向き直った。

「山下剣人、冨野の兄だ。お前さんたち4人組の中で唯一、始めましてになるのかな」

威はその言葉に目を丸くして随分高い位置にある剣人の顔を凝視した。

冨野の兄というのも驚きだが、それよりも威たちが「4人組」だと知っていることでも更に驚きだ。

「母さんの葬式の後、山下の『父親』の所に引き取られそうになったのを阻止してくれて、それ以来一緒に住んでるんだ」

冨野の言う『山下の父親の所』というのは彼の実の父親と正妻のいる屋敷のことだ。山下家は代々日本の伝統的な武道を賞する家系で、外国の血が自分たちの血筋に入ることを中心に厭っていた。故に、彼の父親はずっと愛してきた冨野の母親を愛人にすることしか出来ず、『家』が選んだ格式ある血筋の女性を妻に迎えていた。

冨野が威の目の前の人物を『兄』だというのなら、彼は冨野の父親と正妻の間に生まれた長男ということになるのだろうか。

「弟を引き取るのは兄としての役目だからな」

異母兄としては珍しい考え方に、威は至極感心した。

「普通の母親違いの兄弟だと、隼人くんみたいな態度を取るほうが多いと思うんだけどね」

裕穂も威と同じように思っ言葉繋げると、剣人は何を言ってる

んだとばかりに首を傾げてみせた。

「何を言ってるんだ？俺と冨野は母親も父親も一緒の兄弟だぞ」

剣人の爆弾発言に威以外の二人も目を真ん丸くした。特に冨野は本
当に予測すらしていなかったのか固まっている。

「て、理や月路さしゆから何も聞いてないのか？」

さすがに剣人もここにいる全員が知らないことに思い行つたのか、
意外そうにその疑問を口にした。

「理は自分が必要だと判断おもうことしか俺たちには言わない」

「月路は、理が言うだろうからっていう判断したと思う」

とりあえず冨野、威の順番で幼馴染を庇つた彼らに剣人と裕穂は揃
つて大きなため息をついてみせた。

「だめじゃん。理くん。自分、行方不明になるって解ってるのに何
やってんの、あの子」

「……は？」

ため息混じりに本日最大の爆弾を投下してくれた裕穂に、男3人は
ぽかんと大きく口をあけてしまった。

彼女はそんな彼らの反応を然りと予測していたのか、大きな目をす
うつと眇めて悪意のある笑みを浮かべてみせる。

「彼はね、高校一年でどういう経緯でそうなるのか知らないけど行
方不明になるって知っていたの。その上で、僕に冨野くんと威くん
のこと頼むんだよ？守って、手助けを。馬鹿にしてるよね、そ
んなこと頼まれなくてもするのに」

天使の外見とは違う妍けんの含んだ台詞から受ける衝撃は大きすぎるも
のだった。

（知っていた？自分が行方不明になるって）

だからこそ、彼は彼女エアルから翼を受け取ったのか。だからこそ一人だ
けしか戻れないと解つた時に迷いも無くあの世界に自分が残ること
を決めたのか。

手酷いジョークのようだ。最初からの諦めで行動されていたのなら、
いったい自分が努力したことはどうなるのか。自分の選択は何故そ

の未来を変えるために動かなかったのか。

冨野も威と同様に視線を落としている。その顔は今まで見たことも無いような暗い顔だ。

「ま、自分が地球世界こほりに戻ってこれることも知ってるみたいだから、安心して行方不明の道を選んだらうけど、滅茶苦茶迷惑だよねえ」

彼女は怒りの大きさを隠さないまま、そう結論付けると自分の発言で底辺まで落ち込んでいる二人の少年へと近づいた。

夢見の家 回想13（後書き）

銃弾爆撃並みの爆弾発言投下の回でした。

ラブラブ先輩カプル組は他にもいろいろと小ネタを持っています
が、すぐには出してこないでしょう。

長かった『回想』の部分も後一話で終わりです。

前に書いた話ではそのまま使えなかったので書き直していたら迷走
してしまい、途中放棄したくなりましたが、何とかなりそうです。

ただ今、仕事が忙しいので早々にUPできないとは思いますが、気
長にお待ちください。

夢見の家 回想14

「僕は戻ってきた理くんをぼっこぼこにぶん殴るために協力は惜しまないから、全員で道を探そうね」

裕穂はにやりと口元で笑って見せるとぱんぱんと威と洸野の背中を叩いた。

「では、そういうことだから、ここで胸につかえている鬱憤などは取り合えず吐き出しちゃおう。そうすれば案外、楽になるもんさね」彼女の言葉に反応を示したのは洸野だった。彼は威よりも彼女との付き合いが長いためか、彼女が何を言わんとしているのか理解しているようだ。

「あのさ、威、ひとつ聞いていいか？」

投げかけられた問いに威は息を飲んだ。だが取り合えず、了承の意を彼に返す。

今は、どんな言葉にも、どんな問いにも無視をしてはいけないのだ。それが彼女が言おうとしていたことなのだろう。

「お前は、異世界あっちに残りたかったのか？」

威はその問いに大きく目を開いた。どうしてそんな問いをするのか、と見上げた洸野の目が何処となく揺れていた。

（ああ、そうか）

洸野の瞳を見て、威は地球世界ちゆうに戻ってきてからの自分の態度を改めて自覚した。

確かに、あんな態度をとっていれば自分もあちらの世界に残りたかったように見えるだろう。

本当に自分しか見えていなかった事に威は十分に反省するとゆっくりと首を横に振った。

「そんな意味の無いことを思ったりしないさ。ただ二人で戻ってきたかったのに、それが出来なかったことに不甲斐なさを感じてただけだ」

本来、自分たちは4人だった。それが『ただ一人の少女』は親の勝手な都合の犠牲となり自分たちの元から遠い異国の地へと行かされ、そして『自分たちの中心にいた彼』を突然、異界から吹いた風に攫われた。

それに対して自分は周りも見えず、嘆いていただけだった。

「だから、今度はきちんと俺たちの手に取り戻そう」

威の言葉に洸野は目を眇めるようにして笑った。

それはあの初夏の日からやっと見せた微かな笑みだった。

「そうだな、きちんと取り戻して、殴って、抱きしめよう」

洸野の言葉に裕穂はにやりんと口元を歪めると、くくくつと喉を鳴らしながら笑ってみせる。

その姿に、その場にいた男3名は背筋に寒いものを感じざる終えなかった。

「理くんの場合、洸野くんの涙のほうが効くと思うよ。僕がよく使う『自然に涙流す方法』伝授してあげるから、再会の瞬間に使ってみる気ない？」

とんでもないことを言い出す少女に剣人は頭を抱え、洸野は「あはは」と少し退いた笑い声を上げた。

そしてその策略に唯一乗り気に反応したのは、やっと吹っ切れたおかげで自分の中にある自分の思いにきちんと向き合えるようになった威だった。

「いいですね、それ。山下、それ習っておいて実行してみよう」

そうだ、自分勝手にも自らが残ることを決め、それが本当に正しいことだと思い込ませて、『地球世界』にいる人たちにこれほどまでの思いを植え付けた『彼』には報復が必要がある。

それには始終喜怒哀楽が激しくて表情豊かな威自身や、腹に一物も二物もある月路がやるよりも、普段から感情を押さえて周りに迷惑かけないような洸野の方がうってつけた。

「でしょでしょでしょ。この涙は、今まで一度だって剣人にばれたことの無いほど完璧な涙なんだ。やってみる価値あるって」

裕穂は自分の意見に賛成してくれた威に天使のような笑みで笑って見せると、未だ判断をつけかねている自分の恋人とその弟に振り返った。

「協力してくれる、よね？」

「協力してくれる、よね？」

二人から送られる迫力ある笑みを伴った問い掛けに、山下兄弟は揃ってこくこくと頭を縦に振った。

「こくこくこくこく」

手を取り合って喜ぶ天使のような少女と明るさを取り戻した少年の姿に、剣人と冨野は目を見合わせると小さく肩を竦めてみせた。

夢見の家 回想14（後書き）

無敵の子悪魔、御園裕穂^{みその ゆうほ}本領、発揮です。
でも、未だこの時点では威は『優しい先輩』と勘違いしています。
これで『回想』は残り1話となりました。連続でアップできるか、
その時間が残っているか今から勝負です。

夢見の家 回想15（終）

「いいのか？特訓させられるぞ？」

諦めきつた兄の言葉に、洸野は小さく頷く。

「俺も少しばかり怒ってるから、大丈夫です。兄さんこそいいんですか？裕穂さんに好き勝手言われてましたけど」

「それこそ、騙されるのが男の甲斐性つてもんだろ？」

屈託の無い笑顔で、盛大に惚気のぞけられて洸野は問いかけたことを少しだけ後悔した。

目の前には何やら楽しそうに計画を練っている威と裕穂がいる。彼らは何やら相談事を終えるところらに再度視線を向けて、「山下っ！」と手招きをした。

「はいはい、相談事もいいですけど、もうすぐホームルームが始まりますよ。また、夕方にでも集まりませんか？」

洸野の言葉に威と裕穂は目をぱちくりさせると部屋に備え付けの時計を確認した。

どうやら、楽しい会合をしてたために思ったよりも時間が過ぎていたようだ。

「そうだね、じゃ、放課後にまた、生徒会室こいに集合ね」

裕穂は即断でそれだけ決めると自分の鞆を持った。他の3人もそれに倣って部屋を出る。裕穂たちは部屋の施錠を終えると楽しそうに手を振って、教室へと駆けていった。

「それじゃ、俺たちも教室に戻るとしますか」

威が極めて明るく声をかけると、洸野も少しきこちなく「そうだな」と応える。

この違和感もやがて時が解決してくれるだろう。そのための努力を怠らないようにこれからはもっと周りを見据えて頑張らなければ。

威は新たにそう心に決めると、比較的軽い足取りで教室への一步を踏み出したのだった。

お・ま・け

裕穂たちと親交を深めあつた翌日……威は教室の自分の机の上で頭を抱えていた。

この間休んだのだから、ときつちり受けようとした化学の授業。教室に入ってきた威の父・良弘は授業開始と同時に満面の笑みで手にしたプリントを配った。

「今日は、予告どおり授業の前半を使つてテストを行います。ボーダーラインは80点。もちろん、そんな点数も取れなかった人には容赦なく居残りで職員専用トイレの掃除をして貰います」

今日がテストだなんて聴いていなかつた威だつたが、そこそこ化学には自信がある。よつぼど意地悪な問題でなければ、確実に80点は取れるだろうとたかを括くつていた。

しかし、彼はプリントの内容を見て愕然とした。配られたプリントは某T大入試の際に出てくるような内容、更に最近発表されたばかりの論文からの引用もなされている代物だつた。

呆然としている威を余所よそに周りの級友たちは物凄い勢いで解答欄を埋めている。

(これって……これって)

威はとりあえず、自分から見える位置にある冴野の席へと視線を移す。彼は威の視線に気付くと一度謝つてから他の級友たちと同様にプリントへと鉛筆を走らせ始めた。

「おやおや、さぼっていた人にはテストのこと教えては駄目だといつたのに、冴野くんには誰かが教えてしまったようですね」

呆れたように良弘が言うと、級長の中川透なかがわとおるは一旦書く手を止めて、目の前の教科担任に笑いかけた。

「やっぱり人徳の差ではないですか？」

「そうですね。洗野くんにはうちの息子にはない人徳がありますからねえ」

まるで申し合わせたかのように互いになっこりと笑いあうと、彼はまたテストへと取り組み始めた。

(ああああああ………何気に父さん、怒ってたんだ)

確かに怒っているかとは思っていたが、まさかこんな報復を実の息子にかましてくるとは考えもしなかった。

「さあ、前回の授業さえ聞いていれば難しくない問題ですよ。威もちゃんと、頑張ってくださいね」

優しい、本当に見た目だけは優しい父親の笑顔に、言いようも無く冷たいものを背中に感じながら威は泣く泣くテストに向き合っていた。

夢見の家 回想15(終) (後書き)

まだ後、少し時間がありそうなので『回想』15話目アップです。
以前書いた時との設定の食い違いや、一人称の文章を三人称に直したための視点の移動のせいで、途中亀の歩みぐらいに更新が送れましたが、何とか最後までたどり着けました。
次は一気に話の雰囲気が変わり『選挙戦』です。珍しく普通の学園ドラマになります。

夢見の家 選挙 1

あさぎたけの
麻樹威 十六歳・秋

冬も近づくと10月末、威は日当たりのいい自分の席で惰眠を貪っていた。

先程まで、老齡の教諭による催眠術のような古文の授業や、昼休憩に入った教室の適度なざわめきは、眠りの淵を漂っている彼の耳に心地よかった。

ピンポンパンポオン

『一年A組 麻樹威、至急、生徒会室まで出頭せよ、繰り返す、一年A組……………』

「……………」
聴きなれた可愛らしい声がエンドレスで告げる呼び出しに、クラス全員の視線が威へと集まった。

(みーそーの、せーんーぱーいーいーいーっ)
威を襲っていた眠気など、あつという間に取っ払うほどの威力のある校内放送に、彼は無言のまま立ち上がり周りを見渡した。

この放送は絶対本人が部屋に辿り着くまで止まらない。『繰り返すと『一年』の間に微かに音がブツと切り替わる部分があるから、ボイスレコーダーか何かで機械的に繰り返し流させているのかもしれない。

かと言って一人で行くような馬鹿な真似は避けたい。最初は『天使』のようだと思っていた彼女が実際は兇悪な『小悪魔』であることは僅かな付き合い中で十分認識させられている。せめて、自分以外の標的となり得る人物を連れて行かないと、彼女の攻撃を少しでも避けることなど難しいだろう。

「あれ……………、山下は？」

いつもなら、自分の机で本を読んでいるか、威の寝顔を見ながら笑

つているはずの威の幼馴染・山下洸野の姿が、幾ら見回しても見つかからない。

「ああ、山下なら、山下先輩おにいさんに連れて行かれたよ」

応えたのはクラス委員長の中川透なかがわあつあだった。彼は自分の彼女である篠川奈美がわなみと一緒に可愛らしい弁当を広げていた。どうやら、彼女が二人分の弁当を作ってきてそれを一緒につつくようだった。

「それより、あれ、どうにかしろよ」

透と奈美の視線が揃って先程からずっと流れつづけているスピーカーに向けられる。

普通、これほど大々的に校内放送を使いつづければ教師によって止められるのが常なのだが、この学校の多くの先生は成績優秀者に対して全く発言権を持たないため、誰にも止められないのだ。ちなみに残りの先生はといえば威の父親を筆頭にした『この状況を面白がる』ようなぶつ飛んだ先生である。

「いやな予感がするけど、行くしかないよな」

「がんばれよ」「がんばってね」

溜息混じりの威の言葉に、彼らはいっこりと笑って手を振った。

その様子に胡乱な視線を送りつつも、威は暴力的な放送を止めるために生徒会室へと走ったのだった。

夢見の家 選挙1（後書き）

ようやくと始まりました『夢見の家』の3話めです。

今回の話は普通（？）の高校生による日常（??）です。

ファンタジー要素がまったく入っていないですが、ちゃんと『至空の時』のシリーズになります。

長さとしては『回想』と同じぐらいか、もうちょい長いかな。

それなのに今回の部分は文章の流れ上、他の話よりかなり短めで投稿とあいまりました。

とりあえず、またがんばりますので、よろしく願います。

夢見の家 選挙2

威は急いで教室を出ると、廊下をひた走った。放送は未だ止まる気配すらなく同じ内容を繰り返している。

もはや通いなれた生徒会室の前に着くと、ふうつと息を整えてから思い切りよくドアを開けた。

「先輩っ！いますかっ！」

大きな声で怒鳴り込んだ威に部屋の中にいた少女はにっこりと笑って見せた。

「呼び出した本人がいなかったら、冗談にもならないだろう？」

それだけいうと、生徒会長である御園裕穂みその ゆうほは馴れた手つきで放送を止める。悪びれるそぶりさえ見せず、紅茶のカップを机の上に並べる。

「必死で走っていたから疲れただろう？」

並べられている手作りで見られる菓子を胡乱な目つきで見ながら、威は頭を抱えて見せた。

「走らせたのは誰ですか？」

ここでこんな反論をしたところで、目の前の人物が反省をするとは思えなかったが、彼はとりあえず文句をいうと応接セットのソファに身を沈めた。

「あつはは、自分のためだろ？僕ならあんな放送がなっついても優雅に歩いて登場するけどね」

（確かに、そうでしょうよ）

確かに、彼女ならその発言のとおりに行動するだろう。裕穂の行動のかつ跳び方は並みの神経ではないから。

「威くんは理ことわくんと違って甘いもの大丈夫だったよね。茶葉はウバだからミルクティでいい？」

「あ、はい」

返事と同時に丁度良い加減で入れられた紅茶が注がれた。ミルクピ

ツチャーに入った牛乳が添えられているところが心憎い。

カップと一緒に並べられていた裕穂手製のクッキーに舌鼓を打ちながらも、威は警戒を解かなかつた。

「で、何の用ですか」

「うん、大した用事にはならないと思うけど」

裕穂はそこで言葉を切ると、威の向かいのソファに深々と腰をかけた。

「1カ月後の生徒会選挙、僕の推薦って形で生徒会長に立候補して欲しいんだ」

唐突にいわれた言葉に威は一度言葉を頭の中で逡巡させると目をぱちくりとさせた。

「はいいい!?!」

その表情には冗談でしょ? という言葉がありありと見て取れる。

幼等部からはじめ、小中とそんな役職にはほとんど縁はなかつた。というか、そういう役職はすべて義兄・理に任せて自分は運動部の総括や会計職などで済ませてきた威にとってその申し出は晴天の霹靂といつても過言ではなかつた。

「もともと僕の次の生徒会長はほとんど理くん内で内定していたんだけど、彼が行方不明となつたからそれは空転してしまつたんだ」
裕穂にとつてもこれは大きな決断だつた。

だが彼女は目の前の人物がその役をこなせれるという漠然とした確証をもっていた。

「その流れからいくと次の候補は山下でしょう? 理の補佐としてあいつはずつと副会長を歴任してきたんだから」

理が生徒会長に立候補するときは絶対に彼の親友である山下洗野やました せいやが副会長として立候補していた。彼の場合は妾腹だという生立ちのせいで落選するときもあつたが、大体、その後副会長が辞任またはリコールされ、すぐに副会長に押し上げられていた。

「それは、ちよつとできないんだ」

ため息とともに目を眇めた裕穂に威は少し眉をしかめた。

「対抗候補に何かあるんですか？」

彼女は強引で傍若無人なところを持つているが、基本的「身内」として認めた人間には優しい。そんな裕穂が彼を候補者に持つてこないということは、自分の恋人の弟であり、彼女自身も友人として認知している彼にとって不都合な事があるに違いない。

「理くんの空席に自分の力も鑑みずに立候補したのは2年の『山下隼人』だ。これで理由は察知できるよね？」

裕穂の言葉に威は「はい」と短く返した。

『山下隼人』……山下家当主・山下勇人が正妻との間に作った唯一の子供の名前だ。威自身は彼に会ったことはなかったが、周りからの噂で彼が異母弟である洸野に対してかなりの敵愾心を持っていることを知っている。

「彼が生徒会長になったりしたら、僕が2年をかけて作り上げてきた風原学園の風潮を壊されてしまう可能性は高い。かと言って、洸野くんに勝たせるとなると、さすがにまずいだろう？」

「それで、俺ですか」

威は納得すると静かに思考を展開させた。

夢見の家 選挙2（後書き）

本当に久方ぶりの更新です。

はつきりとこのシリーズで最大にファンタジー色の薄い話になっています。正直『選挙』だけなら普通の学園ドラマの一部です。

仮令、^{たとえ}義兄が異世界に迷い込んでいるせいで行方不明でも、登場人物の半数以上が異能の持ち主でも（笑）です。

夢見の家 選挙3

確かにただでさえ異母弟おとういを目の敵にしている隼人の対抗馬として、
洸野が立候補するのはまずい。

かと言って、裕穂の先々代から手がけていた『生徒会の手による生徒のための学校運営』がやっと現実に近い形に持ってきている現在、
下手な人間が生徒会長に就くのも困る、というのが彼女の本音だ。
もともとの予定通りに理が中等部に引き続き、高等部の生徒会長に
就ければ問題などなかった。

しかし今ここにいない人間にそれを頼むことはできない。

裕穂をはじめ学園の改革に勤しんできた者たちの白羽の矢が、そこ
そこ実力がある上に学校副理事長の息子である威に一斉放射されて
もしかたないことだろう。

（でも、この人の言う通りに行動するのがちょっと怖いんだよな」
たった1ヶ月ほどの付き合いとはいえ、彼女の性格の滅茶苦茶さは
肌身に沁しみてきている

。こうなつた場合、自分が彼女の手から逃れるには彼女の納得する
ような別候補者いけにえを提示するしかないだろう。

「えっと、うちのクラスの中川とかは？」

彼ならば威や洸野に次ぐ成績を収めているし、容姿もさほど悪くは
無い。何よりも理が居た時ですら威たちのクラスの学級委員長をし
ていたという実績もある。それに学級委員長をやっているというこ
とは生徒会活動も洩れなく参加しているはずだ。

「彼はすでに恋人の篠川奈美さんと一緒に書記に立候補してるよ」
おしかつたねえ、と付け加える裕穂に威はそれでも食い下がった。
「だったら、それを繰り上げさせて生徒会長にすれば……」

「彼、お家の事情で堺山の跡取りだって公表して無いでしょ。そう
なると一般家庭の生徒に見られるから当選難しくない？」

（あ、そうだった）

それは威も良く知っている彼の事情だ。

彼は威とも張れるぐらいに名家『堺山』家の跡取り候補である。だが両親が駆け落ちで家を出ていたため、自分がその立場の人間であることを知らずに小学生になるまで育った。だが両親が事故死したために、本人の意思も関係なく堺山家に一応引き取られる事になった。

更に自分の位置を確立するために『堺山』の名前を隠した状態で優秀な成績にて小学校から高校までの生活を送ることを義務付けられている。

（そうなる、生徒会長に立候補させるのは難しいか）

この学校の生徒会長には理事長・副理事長よりさまざまな権限と予算を与えられる。それがゆえに利権を取りたい教師・生徒が会長候補のさまざまな情報を手に入れようと暗躍する。

威のように親が突出した立場のものに対してはさほど気にならない攻勢ではあるが、過去、それで友人である山下がいやな思いをしているのは知っている。

そういう人間に必死に自分の場所を確立しようとしている中川ゆうじんの足を引っ張って貰いたくはない、というのが威の正直な考えだった。

「それじゃ……裕穂先輩が再選するとか」

仕方ないとばかりに目先を変えてした威の提案に、裕穂は呆れたように肩を竦めてみせた。

「僕、来年の3月で卒業するけど？」

今、彼女は高校3年で、更に言うところ十月の半ばだ。ほとんどの者がエスカレーター式に大学部に進むために文化祭の終わったこの時期に生徒会役員選挙があるため忘れられがちだが彼女とて『大学受験生』という肩書きを持つ人間にはなっている。

「大学部いつでも生徒会長職を……敷地、近いし」

「面白い案だけど、さすがに却下だね。僕は大学入学と同時に学生会に入るように前生徒会長より念押しされてるんだ」

とことん他の提案を却下され続け威ははあっと大きくため息をつ

いた。

さすがに逃げ場が無い。いや最初から逃げ場がないのはわかっていたのだが、少しの余剰もないぐらいに彼の前には生徒会長になるためのレールが敷き詰められている。

「ううううっ！俺、髪、切りたくないんですけど」

威は頭を抑えながら長髪を湛^{たた}えた自分の頭を抱え込み、本音を吐露した。

夢見の家 選挙3（後書き）

威、そうとうに生徒会長候補になるのを嫌がっています。

物語は途中で少し横道に反れましたが何とか戻ってこれました。（

物語の大半が脇役の立場説明になる小説ってどうなんでしょうね…

…）

ちなみに生徒会長に与えられる権限は普通の学校の教頭ぐらいはあり、更に予算は小さな会社の1年の利益ぐらいはあると考えてください。

夢見の家 選挙 4

中学生の頃から伸ばし始めた威の髪は、現在、腰の辺りまで伸びている。

伸ばし始めたのは義兄よしあにの理あやや親友つぎしの月路えり恵やました史こひりと山下やました洗野せいのが紫がかった黒なんていう特殊な色をした彼の髪を綺麗だと褒めてくれたからだ。更に彼らと別れてからは『願掛け』の意味も加えて前よりも手間をかけて伸ばし続けている。

しかし、生徒会長に立候補するとなるとその髪型に問題が出てくる。校則にて『生徒会長は学園の生徒の模範となるべき服装・髪型をしなければならぬ』と定められており、いかに生徒向けの校則が変わろうが、生徒会長職のみその格好に制限が設けられている。

まず制服はきちんと上部ボタンまでしなくてはいけないし、髪型はショートカットでなくてはならない。

歴代の生徒会長が幾度か改正しようと試みたが、この校則だけは学校側から改変が許されないのが現状だ。

つまり、威のように長髪の生徒が立候補する場合は髪の毛を切つてこなくてはならない。

「髪かあ……僕の時もネックだったんだよねえ」

裕穂ゆほは短い髪がくすぐる自分の頂うなじへと手を当てた。

かつてそこには豊かな栗色の髪が腰の下まで湛えられていた。それを彼女は自分の手で切り落としたのだ。

「そういえば、裕穂先輩は最後の立会演説の時に髪の毛を切り落としましたっけ」

もはや伝説と化している2年前の立会演説会、ほぼ互角とみなされていた一学年上の対立候補に対して裕穂は奇策ともいえる手段で勝利を収めた。

『髪が女の命だというのなら、今、私はここでその命に変えてこの学園の生徒会長という職務をこなす決意を見せましょう』

その言葉と同時に彼女は懐剣を取り出すと自らの髪を大衆の面前でぱつさり切り落とした。驚愕する周りを余所に、彼女は魅力的な笑顔でその場を納め、ほとんど満場一致の状態で生徒会長の椅子を手に入れたのだ。

「僕は高校から学園に上がった外部生つてのもあつたから、それぐらいのパフォーマンスが必要だつたんだよ」

何の気なしに言っているが、当選できるかどうかわからない状態でそんなことをできる事が彼女の非凡さを裏付けている。

「それに僕の前の会長、瀬良昂先輩ひせすはるつていうんだけど、その人から夏休み前に打診があつてから決断するまでに時間があつたから腹もきちんと座つてたからねえ」

その人の名前にも威は覚えがあつた。裕穂と同じように伝説に近い、1代前の生徒会長。

彼の人柄に触れた全学年の生徒に愛され『暁の大天使ミカエル』という字まで与えられていたその人は幼等部・小等部・中等部と経てあがつてくる内部生と、受験により高等部もしくは中等部から入学した外部生との区別を取り払った人物でもある。

その最たるものが威の目の前にいる女性に『君なら、この学園を変える生徒会長になれるから、立候補してね』と白羽の矢を立てたことだろう。

「俺の場合はその猶予すらなしですか」

ため息混じりに威がいうと、裕穂は苦笑をしながら大きな机の向こうにある立派な椅子へと視線を移した。

「次の次の選挙までの1年間だろうが、生徒署名によるリコールができる3ヶ月の間だろうが僕は隼人くんはやとに会長の椅子を与えたくないんだよ」

裕穂にとり『山下隼人』という人物はそれほどまでに鼻持ちなら無い人物だった。

彼が行おうとしているのはこの学園の生徒会長が長い年月をかけて変えてきたことを原点へと返すこと、内部生・外部生の差別化や、

家柄においての優遇などいろいろ画策していることは調べがついている。

しかし今の所、彼はそんな素振りをおくびにも出していないため、情報を流しても選挙妨害と騒がれるだけだ。

生徒会長になって正体を晒したところでリコールする手では、今まで生徒会が苦勞して積み上げてきた学園運営の基盤が無用に引つ掻き回されることになる。

「理くんがいないから、君に言うのは確かに面白くない。それでも今の僕や歴代の生徒会長OBは手段を選ばないんだ」

じっと見つめてくる裕穂に威は大きく息を吐いて、天井を見上げた。確かに自分がやらないとまずい状態というのは改めて理解できた。

理の代わりに自分が立つのも吝かあはれではないと思っている。

(髪の毛、だけなんだよな)

確実に生徒会長になれるというのなら、高校2年間ぐらい髪の毛を切ってもいいくらいまで威自身も譲歩している。願を賭けているといっても、髪が長い状態でも友人たちは四方八方に散り散りとなり、妹も病死したぐらいだから効力など薄かったと割り切れる。

ただやはり自分の知名度は『理の弟』ぐらいなもので内部生で副理事長の息子だとしても2年生で現副会長の弟の対立候補に対してこれといって勝てる要素が見当たらない。そんな状態で先走って髪の毛を切るのはなんと面白くなかった。

夢見の家 選挙4（後書き）

裕穂、なんとか威を説得しようとしています。

今回も本編にあまり出てこない人の話がだいぶ出てきて話が遅々として進みませんでした。

ちなみに隼人は剣人が正妻の子供ではないことを知りません。ゆえに剣人のことは尊敬しており、冨野の事は蛇蝎のごとく憎んでおります。

瀬良昂は『至空シリーズ』の他の話の主人公で、彼の友人は理が麻樹家に引き取られる前の幼馴染です。

夢見の家 選挙5

「髪、切るの、そんなにいや？」

裕穂が不思議そうに見上げてくるのに、今度は威が苦笑した。

「別にいやって訳じゃないですけど、隼人さんに負けた上で更に髪が短くなるってのは本当に面白くないなあって」

彼の言葉に裕穂はぱあっと顔を明るくした。

「なんだ、そんなこと。大丈夫、僕がきちんと君を生徒会長にしてあげるよ」

その顔には微塵の不安も無い。不遜なまでに自分の勝利を信じきっている顔だ。

威は「あー」と気の抜けた声を上げると、机に肩肘をついて裕穂をちろりと見た。

「俺、周りに気を配れないですよ」

「僕がいつ周りに気を配ったの？」

（そりゃ、そうですね）と、威は心の中で納得した。たしかに目の前の少女は周りを巻き込む時に気を配っているようには見えない。

「知名度があるわけじゃないし」

「現在、学年トップって君だよな？」

優秀だった義兄と幼馴染がいない現在、テストでの上位は威と洸野、それから中川とその彼女によって独占状態だ。

「部活もあるし」

「バスケ部の幽霊だっけ？」

それぐらい調べてあるよ、とばかりに裕穂は優雅に笑ってみせる。威は最後に一息つくくと、ぱりぱりと頭をかきむしった。

「本っ当に俺は生徒会長に当選できるんですね」

「僕ができるって実践できなかったことは無いよ」

自信満々に最後の返事を返した裕穂に威は意を決するとぴしりと背筋を伸ばしてソファに座りなおした。

「わかりました、その話、お受けします」

「こちらこそ、よろしく願います」

深々と頭を下げた威に、裕穂もすつと背筋を伸ばして綺麗に頭を下げた。

そして同時に顔を上げると、互いにぶつと吹き出した。

「あははっ、それじゃ決まった所で威くんはお昼にしようか。君、お弁当は？」

笑顔で空になったティーカップを持ち上げた裕穂は軽い足取りでそれを片付けながら同様に笑っている威に問いかけた。

「あー、俺たちの弁当は昔から山下が作ってきてくれるんですけど

……」

山下洗野が包丁を握れるようになった小学3年生の頃より、威たち幼馴染4人の弁当は彼の手製になっている。もちろん、食費も馬鹿にならないだろうから、作って貰った弁当の数に対してそれ相応の金額は無理やり押し付けている。

「そういえば、剣人けんとに洗野くんに話をつけて貰うように言ってあったっけ」

威の言葉で思い出したのか、裕穂は口元に人差し指を付けてしばし考える仕草をとった。

そういえば、と威も自分が生徒会室に呼び出された時の事を思い出す。見渡した教室にはすでに洗野の姿はなく、いつもなら机の横にどっしりと構えている重箱弁当も消えていたように思う。

(さて、どうしよう)

威は自分のお昼分を確保するべく思考を巡らせた。

がらがらがらっ

「裕穂、威との交渉終わったか？」

無遠慮に開いた扉から背の高いがっしりした体格の青年が入ってくる。その途端に裕穂の顔が明るく綻んだ。

「うんっ！ちゃんと了承まで貰ったよ。剣人はどう？」

裕穂の問いかけに黒髪をたたえたその青年はぐっと親指を立てて見せた。

「任せてくれ、ちゃんと『威の了承が得れたら』という返事は貰ってる」

(それ、すごく他人任せな了承じゃん)

威は呆れたように目の前の剣人を見上げた。

ふと見るとその後ろに茶色い髪の毛が見える。どうやら剣人の体に隠れてはいたが冨野もここにきていいるらしい。

「それじゃ、威くんが生徒会長で冨野くんが副会長、それで布陣をひいてかなくちゃ、ね」

明るく会話している二人を余所に疲れた顔の冨野が剣人の後ろから現れた。その腕にはしっかりと威と冨野、二人分の弁当が抱かれている。

「お前が断ってくれると思ってたんだけどな」

冨野は「はあああっ」と大きなため息をつくくと、生徒会室のソファに座っている威の前に弁当の包みを置き、広げ始める。どうやら時間も無いからこの場で食事を済ませてしまっつもりらしい。

「山下おまえだったら断れるのかよ」

威が胡乱な視線で問いかけると、冨野は苦笑しつつ「無理だな」と結論を返した。

夢見の家 選挙5（後書き）

とりあえず、威、承諾です。その所為で洸野まで副会長に立候補することになりました。

と言っても理がちゃんとここにいても、洸野は副会長に立候補させられる運命にあるので、彼にとって二人の申し出は別に苦もないことだったと思います。

夢見の家 選挙6

告示と同時に学園内は生徒会選挙一色に染まった。学校のいたるところにある掲示板には立候補者のポスター（学生らしく手書きのものから、自分のポケットマネーで作りに出したのだろう写真入のものまで）が張り出してある。

会長立候補者は本命の『麻樹理』あきゆいの不在からこれを期に特権を得ようとする者が乱立したが、本命の弟であり副理事長の息子である『麻樹威』あきぎが現生徒会長『御園裕穂』みその ゆすほの推薦で出馬すると判るや早々に届出を取り消した。

「やっぱり隼人はやとくんと君との一騎打ちだねえ」

大方、この状態を予想していた遊歩はつまらなそうに上がってきたばかりの選挙予想が乗った学内新聞へと目を走らせた。

「副会長には洗野こいしくんと1年B組の谷口たにくち啓太けいたくん一人……ってこの子、誰？」

あまり聞きなれない名前だったのか裕穂は口を尖らせながら威に視線を向けた。

「あー、確か麻樹グループ内の企業のどれかの重役の息子だと思います」

記憶を辿り辿り答えた威に彼女はため息混じりに記事の文章を読んでいた。

「あ、だから、『威くんの片腕になれるのは俺しかいません』なんて素敵な談話載せてるんだ」

「はあ？」

威の語尾が不機嫌に上がるのは仕方ないことだろう。

「ああ、素敵に喧嘩売ってますよね」

生徒会執行部の用事で生徒会室に訪れていた中川透なかがわとおるも苦笑しながら学内新聞のその記事を不機嫌そうにしている威の前に広げて見せた。確かにその紙面には数ヶ月前、威を怒らせた谷口が鼻持ちなら無い

笑顔で胸を張っていた。

「うちのクラス人間なら、それが嘘だつて判別^{わか}るけど、この記事だけ読むと威が指定している副会長は『谷口^{かれ}』っていう風にも取れま
すよね」

透と同じく執行部の書類を調べていた透の恋人である篠川奈月^{ささがわ なつき}も困惑の表情を隠しもせず、眉根を寄せた。

そんな友人たちの様子に威は「むむむむむうっ」と唸り声を上げ、
泷野は「威^{おまえ}の有名税だ」と結論づけた。

「書記の男女は中川^{おまえ}達カップルだけか。

会計は男子は現職の道長弓秋^{みちながゆみあき}と隼人の友人、それから他にも二人

主^{けい}か。これは単一候補だからそのまま確定だろ」
後は会計女子は1年B組の大曾我^{おおそが}

裕穂^{ゆず}の後ろで彼女の新聞を覗き込んでいた彼女の恋人である山下^{やました}剣
人はその他の候補者の欄まで目を配っている。

「中川・篠川カップルと道長先輩は知ってるけど、大曾我ってどう
いう奴だ？」

剣人の読み上げた記事を指先でとんとんと叩きながら、威は自分の
傍で同じ内容に目を走らせていた泷野にたずねた。

「大曾我は俺や兄さんと同じ剣道部。女子の中で一番の有望株^{エース}だ。
理数系に強いし、真面目で信頼の置ける人物だって保障できる」

「ただ、ぱつと見て女の子には見えない容姿だがな」

剣人が最後に付け加えた言葉に、泷野は口元を綻ばせて「確かに」
と同意した。それから新聞をばさばさと捲^{めく}ると、目元の涼やかな青
年の写真が乗った紙面を威に示した。

「この男子生徒がどうかした？」

その写真を示された意味がわからない威が、不思議そうに幼馴染へ
と視線を送ると彼は肩を小さく竦めながら、

「これが、大曾我、男にしか見えないだろ？」
と、説明した。

彼の言葉に威は再度、視線を紙面の写真へと移した彼は目を丸くし

た。

「俺や山下より男らしいんじゃないか？」

「来期、僕が計画したとおりの人事になったら、彼女が生徒会役員の中で一番男らしい容姿になるね」

正直な感想を漏らした威に裕穂も追隨する。書記候補のカップルたちも彼らと同じ感想を持ったようだ。実際、山下兄弟も彼女が剣道部に入部してきたときに同様の感想を持った。

剣人にも通じる鋭く涼やかな目つきの上、声も低く、一人称が『俺』と名乗っているため、当初女子更衣室に入る度に悲鳴と苦情が耐えなかったという過去まであるのだ。

「剣人や冨野くんが信頼おけるっていうなら、女子会計は彼女で安心」と

楽しそうに話している自分の恋人の様子に、裕穂は書記・会計の欄に赤ペンで多きく『OK』と書き込んだ。

「後は会長・副会長がきちんとここに二人になるように計画を遂行してくださいだね」

ぱんつと手に持ったものを机の上に置いた裕穂は楽しそうに自分達の後を継ぐ後輩達へと笑いかけるのだった。

夢見の家 選挙6（後書き）

選挙、公示されました。今回は威たちを含む立候補者へとスポットをあてて話を進めることになったのですが、まさかこの部分だけで一話分埋まるとは思いませんでした。もっと単純に流せばよかった。ちなみに風原学園かざはらがくえんは1学年が27クラスもある超マンモス校です。成績・財力・スポーツ特待・芸能・芸術いろいろな分野のものがあるのでそれを統括する生徒会も人員がそれなりに必要になります。生徒会長・副会長・会計・書記などの役員を筆頭に任意・役員からの推薦・中等部での役員という履歴などで選ばれた生徒会執行部が動きます。執行部は役員になるための足がかりとなっている部分が多いため、高等部入学と同時に執行部へと配属されていた冨野・透・奈月などは、すんなりと役員への立候補ができるというわけです。

夢見の家 選挙7

やけに自信ありそうに笑っている裕穂に威は胡乱うらんな目を向けた。

「もう『勝算のある計画』はできてるんですか？」

未だ、ここにいる誰にも計画の詳細は語られていない。

彼女の持論として『計画あんやくの概要すしみちは恋人にだろうと明かさない』ことにしているらしい。

「まずは、今から新聞部の取材を受けて貰うよ。質問には『正直』に答えてあげてね」

彼女が台詞を言い終わるや否や、生徒会室の扉が勢いよく開いた。

「お招きありがとうございます、生徒会長ミレナイ。あなたの下僕ただいも参上しました」

学内でも『特殊へん』な意味で有名な新聞部部长・徳永元保とくながもとやすが元気な挨拶をしてずかずかと乗り込んでくる。その後ろには、現生徒会・書記で剣人の幼馴染であるの早川はやかわ叡知えいちと不満そうにしているこれもまた新聞部の有名インタビュアーである森本もりもと風野ふうのが従っていた。

突然の闖入者ちんにゅうしゃに威は目の前の机に懐きながら、平然としている剣人へとじと目で講義の意を送って見せた。

「なんで、新聞部部长みそのせんばいが生徒会長の下僕ただいなんですか」

威の当然の問いに、同じように脱力していた洸野が頭をかいた。

「取材制限はしない、質問にはいつも快く答える、先にデータを与えて出すタイミングを計るように要請する……ここが強制じゃないところがあの人の頭のいい所だな、そういうことの積み重ねと、あともともと徳永先輩の好みど真中だったことで、ああなったらしいって、理が言っていた」

「そうですかい」

友人の説明に威は「はあああつ」と大きく息を吐いた。

その間にも徳永による『裕穂を褒め称える言葉あいさつ』は続いている。

(どうしたものかな)

威は視線を、徳永と一緒に来た森本に向けた。彼は裕穂に『挨拶』
をしている自分の先輩を呆れた顔で見ていたが、威の視線が自分の
方を向いているのに気づくと威の座るソファへと近づいてきた。

威は一旦ソファから立ち上がり、自分の向かいの席を森本へと勧め
た。

「始めまして、新聞部記者の森本風野です」

「始めまして、会長に立候補した麻樹威です。森本先輩の書いた記
事は何度か読ませて貰っています」

威の言葉に森本は眼鏡の奥にある目を少しだけ眇めた。その表情や
口調から自分の対象者が言っている言葉が本心からのものかを探っ
ているようだ。

「インタビューだって聞きましたけど、徳永先輩の『挨拶』が終わ
るまで待ちますか？」

そんな視線を感じつつも、威は未だ口が止まらない新聞部部长へと
視線を向けて目の前の森本へと問いかけてみた。

「いや、あれは部長の気が済むまで永遠に終わらないから、先に始
めよう」

その態度が気に入ったのか、部屋に入ってきた時とは打って変わっ
た笑顔で、森本は胸ポケットの手帳を取り出した。

「生徒会長としての目標やその指針は文章としてあがってきている
のですっ飛ばして、君の頭の中での副会長人事から聞かせて貰える
かな？」

唐突な質問に威はきょとんとした表情を見せてから、すううつと目
元を眇めた。

「どうして、その質問が来るんです？」

そういえば先ほど読んだ気に食わない谷口のインタビューもこの人
の手によるものだった、と威は紙面の中の記者名を思い出していた。
威の表情に、森本はにやり、と笑うと自分の手帳の上をペン先でと
んとんと叩く。

「いろいろと1年生の教室をインタビューしてたら君のいるA組と

他のクラスで君が推している副会長の名前が違ったからね」
記者である森本にとっても、目の前の人物の様子は面白いものだった。

この前の新聞を作る際に、なぜ部長が副会長候補である谷口のインタビューを優先させたのかこれで合点がいった。

彼は自分が女神のごとく崇める現生徒会長からこの情報を仕入れていたのだ。

（他人に踊らされて記事を書くのは面白くないけど、事実にとぐわない記事を書かせることだけはしないからよしとするか）

裕穂の采配で自分が動かされていることに少しだけ不満を感じつつも、森本は目の前の彼女が推薦する次期生徒会長候補へと意識を戻した。

夢見の家 選挙7（後書き）

前に書いた時に考えるのが面倒くさくて端折ったところを加えたら驚きの長さ。立会演説が遠いです。

今回初登場の3人のうち新聞部の部長のみモブです。

叡知は剣人とも幼馴染ですが、理と恵吏とも友人でいろいろと情報通な人です。

森本はモブ予定が書いていて楽しかったので、たぶんこの後も出てくると思います。どうせ徳永卒業後は彼が新聞部の部長でしょうし、とりあえず、インタビューが済んだら立会演説が始められると思うので、そしたらこの章もやっと終わります。後、何話かかるのかは不明かも。

夢見の家 選挙8

森本自身、本来の会長候補であった麻樹理には何度と無く取材をしたことがあった。

目の前の少年とは違い、やけに落ち着いた雰囲気を持った年下の少年は身の内から溢れるカリスマとそれに見合う容姿、揺るがない意思、ずば抜けた知識という文化面だけでなく、武道・武術に秀で、どおスポーツをやらせても一通りこなしてしまうという天性の運動神経という非の打ち所も無い人物だった。

目の前で自分を見返してくる少年は、彼には劣るものの整った容姿と意思の強そうな瞳、そして成績も義兄の理やアメリカの大学に引き抜かれたという彼らの幼馴染み・月路恵吏つきじ へいりには及ばないが、全国で十位入るほど優れている。

家柄にしても、後継者に選ばれていなかったことで誤解をしている者も多いが、現麻樹グループ総帥・麻樹実あきねのとその夫・良弘りょうこうとの子供は理ではなく威のほうである。

頭の切り替えにしても、先ほどのやりとりでそれほど鈍くはないと判断できる。

「君が、誰を副会長に推しているのかしっかりと示しておいたほうが後々得策じゃないかなと思うんだ」
森本の言葉に威はにっこり笑って頷いた。

「どうやらこのインタビューは不用意な邪魔者を牽制するためのものだよ。」

「それならば策略を巡らせずに正直に答えた方がいいだろう。」

「森本さんは理にも取材したことありましたよね」

「勿論」

森本が頷くと、威は彼にしては珍しいほどの悠然とした態度で微笑むと、組み合わせていた自分の膝の上に手を組んで置いた。

「あの理が信頼し、中等部時代、義兄あにの片腕として副会長をやって

いた俺たちの幼馴染、山下洸野以外、考えたことがないです」
ありきたりの返事ではあるが、確信を突いている返事だった。
(それに、こいつも義兄ゆずりのカリスマを持っている)

だからこそ、あの破天荒な天使が自分の次代の会長に推しているのか、森本は改めて彼女の洞察力の凄さに感服した。

しかし、これだけで質問を終わらせては面白くない。

もつといるいろと引き出して見るのも一興だとばかりに森本は自分の手帳の中に記しておいた質問を投げつけてみた。

「成績的にも現状、君に次いで学年第二位の成績だから？」

返答しただいでは、『麻樹威』の株を著しく下げる質問に、野放しにしておいた徳永が慌てたが、裕穂はそんな彼の腕を軽く捕まえると『大丈夫』とばかりに軽く微笑んで見せた。

自分を試すような設問に、威は少し目を眇めた。

「成績だけで振り分けて生徒会役員は選ばれるのではないと思えます。現に会計女子に唯一立候補している大曾我さんは組という事ですが、現生徒会副会長の山下先輩や、先ほど名前の挙がった山下洸野からの信頼も厚く、彼女ならばその役目を全うしてくれるだろうと言われています」

凜とした声で自分の意見を述べた威に森本はにっこりと笑って頭を下げた。

「確かに、今の質問は俺の失言でした」

わざと挑発したように設問したことなどおくびにも出さないとこころはインタビュアーとして食えないところだろう。威自身も前に義兄さへの口から、この人とのやり取りが駆け引きみたいで面白いという話を聞いていなければ、間違いなく挑発にのってしまっただろう。あの『人が食えないの代名詞』と裕穂の評価を受けていた理が面白いと言つという事は、絶対に一癖二癖あるはずなのだ。

今までの会話だって、挑発したり、欲しい言葉を引き出そうとしたりと、インタビューの主導権をしっかりと取るうとしている。それなのに、威が確実に触れて欲しくない　多分、その話題に入った

ら口を噤んでしまつたろう
ない。

理の行方については一切触れてこ

その後、規定どおりにいくつかの質問を重ねた森本は、さらさらとその内容を手帳に記してから顔を上げた。

「それじゃ、最後に、規定どおりに髪を切ると思つけどそれは、いつ?」

この質問に威は言葉を詰まらせた。裕穂から未だ何時切るのか聞いていない。彼は口元にこぶしを当てると、しばし考える仕草を作つた。

「そうですね、それをお伝えしてしまうと面白くないので、適当にそちらでスクープしてください」

威の答えが気に入ったのか、森本は今までの中で一番の笑顔を作るとソファから立ち上がった。

夢見の家 選挙8（後書き）

あれれ、インタビューが終わりきっていません。

おかしいな。この話の半分ぐらいでインタビューシーンは終わるはずだったんですが、森本先輩粘って登場シーンを引き伸ばしています。

でも、さすがに次には選挙戦に入れると思います。

夢見の家 選挙9

威がインタビューを受けた二日後に出た学内新聞によって選挙の勢力図はかなり変わった。

大言壮語を用いて『麻樹威』の支持を受けているように振舞っていた谷口の人気は、それ以降、下降しており、彼を用いて洗野の支持は勿論、『谷口を推挙している』ことで威の支持を下げようとしていた隼人はその事を苦々しく思っているらしい。

なお、谷口は著しい選挙妨害だと新聞部や威に文句をつけたが、新聞部には『嘘の情報を出したのは？』と逆に文句をつけられ、威に至っては一睨みで教室から追い払われた。

「明日には立会演説会ですよね」

威は、最近、通いなれた生徒会室のソファの上で上体を伸ばしながらくりくりと自分の長い髪の毛の感触を確かめる。

裕穂の指示で切る覚悟はできた髪だが、未だ、いつ切るのか知らされてない。

もしかしたら裕穂の時と同様に立会演説会の真つ最中に切れと言われるかもしれないとは思っているが、目の前の女性が、自分の二番煎じみたいな事を自分にやらせるのが疑問である。

「校則が変わって、壇上に刃物が持つていけなくなっただからねえ」

裕穂は間延びした口調で言うと、小さく「ふふふ」と笑った。

「へ？」

「僕の演説の際のパフォーマンスが一部の教師に受けが悪くてね、翌年から壇上に刃物は持ち込まないことって改正されたんだよ」

驚いた顔で自分を見ている威に、彼女は口元の笑みを深くする。生徒会室の外では新聞部の部員が張り付いているのが、わかっているのかその態度に些かの惑いは見せない。

「だから、君にはこの予定で行動して貰う」

彼女はそういいながら、威の前に数枚の書類を差し出した。どうや

ら明日の演説などのための草案らしい。

彼はその書類にぎつと目を通す。その内容に目を更に大きく見開き、威はくしゃくしゃと頭を掻いた。

「こんなこと、できるんですか？」

「みんなね、生徒会長になるべき『校則』を読み誤ってるんだよ。本当は、それでOKなんだ」

自信満々で宣言する裕穂に、威は校則の一文を思い出してみる。

『生徒会長は学園の生徒の模範となるべき服装・髪型をしなくてはならない』

そして裕穂から出された草案を見る。

「確かに、そうですけど」

呆れる威に裕穂は親指を立てて、につこり笑った。

「会長候補が二人いる場合は特に、この一文に準なぞらえて考えれば判ることなんだ」

確かにそうだ、と威は改めて思った。

それならば、彼女の立てた草案は一番良策だ。

「明日、隼人さんが怒って罵るのが楽しみです」

威の言葉に、同じ事を考えていた裕穂は大きく頷いて見せた。

選挙当日、午前中は普通に授業を受けていた生徒は昼食後、すべて高校の大ホールへと移動した。

2500名近い総生徒を収容できるホールではクラスなど関係なく思い思いの位置に生徒が着席していた。

「圧巻ですね」

舞台の端から客席をのぞいた威に、「いい眺めだろう？」と裕穂は

楽しそうに答えた。

「全校生徒が集まるのは、生徒会選挙とその後の就任の生徒総会、それから会長命令で行われる生徒総会の時だけだからね、文化祭の開会式や、その他の学級行事だとクラス控えの生徒とかでだいぶ人数が削られるし、入学式・卒業式は1学年のみ、後は体育祭だけどあれは大運動場のほうだから、このホールは使わないしねえ」

つまりは生徒会のためだけにのみこのホールは全使用される。そのことに威は改めて感慨を覚えた。

ふと後ろからの視線を感じ、ばれない様に視線を動かすと威の後ろで控えていた山下隼人がまだ長いままの威の髪を見ながら、ひそひそと自分の推薦人と話していた。時々洩れる下卑た笑いから、裕穂の意図は読まれていないことが判る。

(さて、結果ご弄^{ごろう}じる)

威は隼人から見えないように口角を上げると、生徒の視線が集まる舞台へと一步を踏み出した。

夢見の家 選挙9（後書き）

やっと、立会演説が始まります。

これさえ終われば長かった選挙戦も終わりです。

裕穂は他にもいろいろ仕込んでいますが、そのあたりは立会演説が始まれば判ると思います。

夢見の家 選挙 10

舞台上に姿を現した威を見て、全校生徒がどよめく。

彼の頭を飾るのは未だ短くなっていない、腰まである紫がかった黒髪だった。

そのどよめきの中で立候補した全員が用意されていたパイプ椅子に腰を下ろした。

最後に、現生徒会長である裕穂が出てきて、舞台の上に設置された演説台の前の後ろに立つとずっと手を上げた。それだけで先ほどまで地鳴りのように響いていたどよめきがぴたりととまる。

「それでは、生徒会選出のための立会演説を始めます。我が愛する生徒諸君は、それぞれの意見を聞き、自分によってよりより人物を選んでくれ。

もちろん、僕も僕が推すべき人物の応援演説をさせて貰う。そのときは、きちんと合いの手を入れてくれよ？」

いつもどおりの男らしい挨拶を済ませると、同時に彼女を称える歓声が会場内を埋め尽くした。その様子に裕穂は花も綻ぶ笑みを浮かべ、悠然とした足取りで威の後ろに着席する。

その様子を隼人は忌々しそうに見つめていた。

本来ならば、彼女は恋人の弟でもある自分を応援するべきなのだと、隼人は考えていた。勿論、その旨を彼女自身にも伝えてみた。

しかし、その言葉は簡単に却下されたのだ。

（何が、最高の生徒会だ）

記憶に残る言葉に小さく彼は舌打ちをした。隼人は裕穂が威を推薦という形で立候補させたとき、非難するために彼女を呼び出した。

『君ではこの学校の生徒のための最高の生徒会を作ることなど無理だよ。力不足だ』

そんな言葉で、彼女は彼の主張も存在すら否定して見せた。隔世遺伝で現れた自分の異母弟にも似た瞳は、冷淡に隼人自身を切り捨て

ていた。

（それなのに、僕の変わりに担ぎ出したのがこんな一年生だと？）
隼人の屈辱的な怒りは、隣で悠然と構えている対立候補へと移る。
義兄・理のかわりに立候補したこの少年が、自分より勝っているとは隼人には到底思えなかった。

（麻樹理^{あいつ}がもし居たなら、僕だって立候補などしなかった）
まだ自分が小等部だった頃、自分は同じように彼の義兄と戦った。
結果は惨憺^{もの}たる惨敗だった。開票された内容で、一学年したの人間に五倍以上の票差を付けられて負けたのだ。

それ以来、自分はある男には挑むことなどしなかった。
しかし、今、自分の横に座っている人物にはそれほどの脅威を感じない。

たしかに、顔立ちは整っているだろうが、それだけだ。

誰をも圧倒するカリスマも、ずば抜けた頭脳も、洞察力だって普通の人より少しだけ秀でていくぐらいにしか見えない。

（唯一義兄に勝っているとすれば血筋のよさだけか）

学校側の人間で知らない者も多いが、麻樹の家の血を引いているのは威の方だ。

それなのに、優秀さで劣る彼は義兄として入った理に後継者の座を奪われた。

（つまり、それだけの人物だということだ）

隼人はそう結論づけると、彼の頭を飾っている紫がかった黒い長髪を見た。

これにしたって、恐らく現生徒会長の策で壇上で切るのだろうか、その事が新しい校則で禁止されたことは頭に入っていないらしい。
（策士策におぼれる、だな）

隼人は毀れ出そうになる笑いかみ殺しつつ、未だ続いている他の役員候補の演説へと意識を集中させた。

威は隼人の視線を受け流しながら、内心呆れていた。彼の考えていることなど、その瞳や表情で手に取るように理解できる。

（こんなんで御園先輩と対峙しようとは……）

思わず出そうになった笑いを何とかかき殺しながら、彼は隣で牽制を張り続けている彼を侮蔑していた。

少なくとも、こんなだもれな感情を出している人間が、自分の後ろに座っている威の推薦者である現生徒会長に適うはずが無い。

彼女はあの切れ者である自分の義兄が、自分達幼馴染み以外で珍しく認められた人物なのだ。

それに彼は侮っているが威自身だって、理から『案外、食わせ者』との評価を受けている。

（まだまだ、甘い）

自分の親友の異母兄を盗み見ながら、彼は小さく息を吐いた。

「それでは、会長候補のお二人の演説へと入ります。まずは1年A組・麻樹威さん。推薦者・3年A組・御園裕穂さん、お願いします」放送部が読み上げる名前に、威はゆっくりと席から立ち上がった。

夢見の家 選挙10（後書き）

演説が始まるかと思ったら、隼人さんが長々とどうでもいいことを喋り散らかしてくれました。

でもとりあえず、とうとう演説まで行ってくれたので何とかかなりそうです。

夢見の家 選挙 11

立会演説は、まず推薦者からの紹介から始まる。

慣れた様子で演説台に立った裕穂は場内の至る所から沸き起こった喝采を右手をすつと上げることとで止める。

「それでは立候補者の若い順からということなので、僕の推薦する麻樹威くんから紹介させて貰います。

彼はみなさんご存知のとおり、幼等部、小等部、中等部とすべて2年づつ務めていた伝説の生徒会長にして、本来ならばこの場で悠々と会長就任の演説を垂れ流していただろう麻樹理くんの義弟おとこにあたります。

もちろん、それだけの要因よんで僕が彼を推す訳もなく、理くん曰く『義弟あいつは自分以上に食わせ者』といわしめるぐらい、僕の後進に相應しい人物であることは、先日、威くん自身にインタビューした新聞部の記者の方が一番わかっておいでかと思えます」

壇上の裕穂はそう言うのと新聞部のための特別ブース付近にいた森本に笑いかける。

それに気づいた全校生徒の視線を感じつつ、森本も相槌のようにやりと笑い返して見せた。

「更に言えば、彼はこの学園の副理事にして最大の庇護者・麻樹実女史の長男として、血筋・素養も申し分ないものを持っております」
続いて彼女の口から語られる自分自身の環境・略歴を聞き流しながら威は抜け目なく客席の様子を見回してみた。

（あれが、仕込み、かな？）

壇上のみ照らされ少し翳って醜い客席の最前列には隼人と仲のいい人物たちが陣取っていた。

大体的場合、先生に目をつけられやすい最前列に座っている人間など珍しいので、とても目立っている。

彼らの視線は壇上で熱弁を振るっている裕穂ではなくその後ろで笑

みを張り付かせている威に……正確には威自身の頭を飾っている未だ長いその髪へと注がれている。

「それでは、僕の演説が長くなるのも野暮なので、彼が目指す生徒会の有り様は彼自身に語って貰うことにしましょう」

打ち合わ通りの決め言葉を言ってから、裕穂はその場所を後ろに控えていた威へ譲る。

壇上にすっと立った威自身へと全校生徒の視線が集まる。彼らは威の髪の長さを確認する怪訝そうにひそひそと隣の友人たちと言葉を交わし始めている。

威はそんな生徒の様子に義兄より『それが一番食えないんだよ』といわれた意味深の笑みを作って会場へと視線をめぐらせた。

とたん、ひそひそと声を潜めて話していた生徒たちの動きが止まり、女生徒の中には頬をそめて俯く人物まで現れる。

最後に一番最前列に座る隼人の友人達にゆっくり微笑んでから威は大きく息を吸い込んだ。

「ただいま紹介に与りました1年A組の麻樹威です。まだ最下学年ではありますが、この学園においてはすでに9年の月日を過ごさせて頂いています。もちろん、みなさまがご存知の通り、幼等部・小等部・中等部と生徒会長を務めてきた麻樹理は、私の義兄にあたります。その義兄がある事情により学園から去ることになり、彼の意思を継ぐためにも自分が立候補した所存です。」

自分が目指す生徒会というのは……」
威の弁舌が淀みなく進む中、隼人の友人たちは微笑みで気圧されたのか、自分達はどうすべきかと視線で威の後ろで順番を待っている自分が支援している人物へと支持を乞うた。隼人は演説が始まっているのに未だ行動を起こさない彼らに、明らかに苛立ちをあらわすと、「さつさとやれ」とばかりに視線を動かした。

彼らは無責任にも思える指示にそれでも小さく頷くと、ごくりと息を飲んだ。

威は彼らのやり取りを視界の端で捕らえて、内心、ほくそえむ。そ

して、彼らが行動を起こしやすいうように演説の切がいい所で一拍の時間を作ってやった。

夢見の家 選挙11（後書き）

演説開始です。とりあえず自己紹介です。

威は、理たちの考えでは天然・無自覚で腹黒さを発揮してくれるところがあるので、そのあたりが裕穂のお眼鏡に叶ったと考えてください。

やっとこさ、終わりが見えてきました。話の途中から依然書いたものを完璧に無視して進めていたので、最後の最後まで前には書いた文章の名残を出したいです。

夢見の家 選挙 1 2

「会長職に就こうとしているのに、生徒会規約をしょっぱなから護っていない人間にどれほど立派なことができるんですかあ？」

「それとも、二番煎じで今からその頭を丸めるんですかあ？」

音響を考えた構造のホールで、その声は大きく響いた。

一瞬にしてまたざわめきがホールを満たす。控えていた教師の一人が騒ぎ出した生徒達を止めようとするのを、威は視線だけで止める。その上で、彼は極上の笑みをその顔の上に乗せて、壇下にて騒いでいる生徒達へと視線を投げかけ、そのまま会場も見回した。

「俺の髪の毛を按じてくれている熱烈なファンの方が騒いでしまい申し訳ないです。ですが、この髪は校則どおりのものであることは教師の面々にはわかっていただいていると思います」

威の言葉に教師の大半は困惑した顔をしている。さすがに学校長ならびに教頭クラスは知っているようだが、日頃「校則を遵守せよ」とばかりに声高に怒鳴っている生活指導の担当教諭までがぼかんと口を開けている様に、威は心の中で大笑いするしかなかった。

「校則の一文『生徒会長は学園の生徒の模範となるべき服装・髪型をしなくてはならない』と記されており、その髪型がショートカットであることは規約のほうに記されています。」

つまりは候補者である俺自身が、勝手に自らを生徒会長に当選すると確信し、髪を切ることは僭越な行為で、もう一人の候補者である山下隼人さんへの侮辱とも成り得ると思えたのです。

もちろん、ここにいる全校生徒が俺を生徒会長へと選んでくれたときには、きちんとその規則に則り、断髪式を行うつもりです。その時には新聞部の方達は勿論、最前列に居られる放送部の先輩達にも記録係として協力をお願いしたい所存です」

壇上で当選後のセレモニーを宣言した威に場内が色めき立つ。特に最前列に座っていた複数人の顔に紅潮していた。

(御園先輩の資料どおりだな)

威は改めて後ろでこの状況を面白がっているだろう曲者の少女に感心した。

彼女の資料では隼人が裕穂が会長在位期間に辛酸を舐める状態にあった放送部にすりより、威や洸野にとり不名誉な作り話を流そうとしていた。もちろん、自分が発信という形ではなく、放送部の部長の隣に座っている隼人の腰巾着を使ってはいたので、表立って威たちも行動を起こしにくかった。

更に放送部自体も裕穂たちを怒らせた部長が引退し、新しく部長職に就いた人間は思ったよりも常識人だった為に、隼人の作戦はほとんど不発に終わっていた。

今、隼人の側についている放送部の下っ端たちも、この演説を聞きすぐにどちらの方が自分達の『利』であるのか計算がついたようだ。期待に瞳をきらきらさせている放送部の人間達に隼人の腰巾着の一人が小さく舌打ちをした。

「もちろん、そんなひとつのイベントだけで会長になれるとは思いません。冒頭に申し上げたとおりの俺自身の指針、それから目指すべきところへとこの学園を変えるための力は十分に惜しまないつもりです。みなさんの判断にすべてを託して、立候補の演説とさせていただきます」

威がそう締めくくり、すうっと背筋を伸ばすと、大きな拍手とともに歓声があがった。どうやらそれなりに生徒達の関心を集められたようだ。

威は一步後ろにさがり、左、右、正面の順に頭を下げながら裕穂とともに他の候補者が控えている場所まで戻った。

ふと見ると幼馴染の洸野と中川・篠川カップルが目線で笑い返してくれた。

(とりあえず、俺のやるべきことはやった)

彼らの視線を鑑みて、そう確信した威は優雅な仕草で自分の場所であるパイプ椅子に腰を下ろした。

「続いて2年C組・山下隼人さん。推薦者・2年C組・本橋忠行さん、お願いします」

歓声は、未だ続いている。

紹介の聲がかき消されている事実には、隼人はその顔に苛立ちを乗せた。それを推薦者とされている人物が嗜^{たしな}めているが、それすらも耳に入っていないようだった。

夢見の家 選挙12（後書き）

やっと威の演説が終わりました。後は隼人さんがやってくれるだけです。

長かった。本当にうにゃうにゃと伸び続ける話でした。これで従来どおりにファンタジーっぽい話に戻れます。

夢見の家 選挙 13

隼人の様子を見ていた裕穂が「自滅、だな」と、威にしか聞こえないような小さな声でつぶやいた。

威はその呟きに小さくため息をついた。

このホールは大人数を収容するために、後方の座席に座った人間でも舞台上の人間の様子が見られるようにヴィジョンが写るようになっていた。そこには不機嫌をありありとその表情に乗せたもう一人の候補者の顔が画面いっぱいに写っていた。

この機材は、一応、放送部の管理となつていて、隼人は彼らを味方に付ける算段をしていたはずだった。

しかし、彼らは威の発した言葉で、完璧に隼人から離れて自分にとってより得で面白い方へ、と考えたのだろう。そうでなければ、自分の指示している候補者が不利になるような表情を映すことなどしなかつたはずだ。

舞台上では、隼人の推薦者である本橋もとはしという人物が何事かを必死に説明している。それすらも空しいほどに、会場は彼らに一度たりとも味方にならなかつたのである。

「と、いうわけで、会長就任お・め・で・と〜!!」

夕方には出た開票結果は、見事、威の当選という結果となった。

本人が驚くほどの大差での勝利は明らかに途中で自分の味方する勢力を変えた放送部と、当初から裕穂の指示によりかすかに威よりの報道をしていた新聞部の力のおかげである、と威は確信している。

生徒会室には先ほどからはしゃいでいる元・生徒会長である御園裕穂とその恋人の山下剣人以外に、威と同じように当選した人間が集

まっていた。

副会長職についた幼馴染みの山下洗野を始め、前期と同じく会計に就任してくれた唯一の二年生・道長弓秋、中川透・篠川奈月など威にとつては顔馴染みともいえるメンバーが揃っていた。

その中で、唯一、初顔合わせに近い存在である新しく会計職についた大曾我圭^{おおそが けい}だけが、所在なさそうにしていた。

そんな様子を一通り観察してから、威は仰々しく裕穂に向かって頭を下げる。

「なんか全てが御園先輩の目論見どおりって言うのがひっかかりますが、取り敢えずありがとうございます」

「何か、前置きが気に入らないけど。どういたしまして」

裕穂はまるでそこが華やかな舞踏会でもあるかのような、優雅な仕事で威の礼にお辞儀を返してみせた。しかしその瞳がぜんぜん笑っていないことはその場にいる全員が判っていた。

そんな体感気温が下がるようなやりとりが終わると、威はおもむろに生徒会長用の机へと移動して学生が使うには立派な椅子に腰掛けた。裕穂がこの椅子に座っていたときはどれだけ大きな椅子かと思っていたが、普通の高校生男子並みの体格を持つ威が座ると、それほど違和感のない風景になった。

威は机の上に載った書類に目を通した。それは学園側からすべての責任を学生の主たる生徒会長へと一時委譲するための書類だった。どうやらこれが会長としての初めての仕事となる書類らしい。

「で、断髪式はすぐやるの？」

「新聞部と放送部の機材が揃ったら、隣の会議室を使ってやるうかと」

裕穂はじいっと威の髪の毛に視線を固定しながら、何の気なしに聞いてくる。そんな質問に威も生徒会長就任のための書類を書きながら答えた。

「この部屋でもいいじゃない？」

「放送部の機材が入るようなら考えます」

実際、無機質な会議室よりかはこの部屋の方が絵になるとは思う。とりあえず、両方の部長が来たら提案してみてもいいかもしれない。思ったより枚数の多い書類たちをテキパキと処理しながら、威は徒然にそう思考する。

ふと、不吉な視線を感じて威は机の前に視線を戻す。すると思ったよりも近い位置に満面の笑みを浮かべている裕穂の顔があった。

夢見の家 選挙13（後書き）

結局、圧勝で選挙は終わりです。

実は隼人さんは自分で思っているより人気がありません。なぜなら、圧倒的な人気を誇っていた理に対してあまり宜しくない態度をとっていたためです。

あと、今回、やっと気づいたのですが当初の設定と名前を間違っていました。

最初の設定では洗野たちの父親が『隼人』でこの次兄は『勇人』となっていました。変えようかなやんだんですが、さすがに面倒なので二人の名前をあべこべにすることにします。

夢見の家 選挙14（終）

「うわあっ！」

思わず叫び声をあげた威に、裕穂はぶうつと頬を膨らました。しかしその瞳は妖しい光を湛えたまま笑っている。

「人と会話するときは相手の顔見て話せて習わなかった？」

（先輩だって、おんなじ様なことしたことあるでしょっ！！）

心の奥底からの叫びをなんとか喉元で押しとどめて、威は目の前の前生徒会長へと胡乱な視線を向けた。

「で、何か御用ですか。前生徒会長」

気を取り直して訊ねた威に、彼女はわが意を得たりとばかりに爆弾発言を投下した。

「うんっ！威くんの髪の毛、切った後いらんなら僕に頂戴！」

「……はああ！？」「」

威だけではなく、その言葉を発した裕穂の恋人である剣人までもがその申し出に驚きの声を上げた。

しかし、そんな周りの反応もどこ吹く風とばかりに、彼女は更に笑みを深めた。

「捨てるのなんてもつたないじゃない。だから、僕が大切に使うてあげる」

（いや、貴女に『大切に』使ってもらうつても怖いんですが）

現在の髪の毛の持ち主である威の心の叫びを読み取ったかのように、彼女はさらに畳み掛けた。

「くれる、よね」

もはや、疑問符すらつけてもらえなかった。

決定事項となった自分髪の毛の行方に威は大きなため息と共に承諾して見せたのだった。

結局、断髪式は生徒会室で滞りなく行われた。

新聞部も放送部も裕穂の申し出に、『そちらのほうが見栄えがいいですね』と乗り乗りで許諾した。

放送部の提案で某国技の断髪式のように数人で少しずつ鋏を入れられ、最後に前生徒会長の裕穂が締めるように大きく残りを切り落とす。

数年ぶりに軽くなった頭に少し寂しさを感じる。威は白い紙の上に綺麗に揃えられたかつての自分の髪の毛を観ながら、小さく息を吐いた。並べられた髪の毛の横では、裕穂と面白いからと来ていたこの学園の教師でもある威の父親・良弘が何か意味ありげに笑い合いながら喋っている。その後ろに『ふふふふふ』と不気味な文字が見える事には、みんな関わらないようにしている。

会話がひと段落済んだのか、彼女は並べられている髪の毛を至極丁寧に白い紙で巻いて包む。その丁寧さに、何か悪寒を感じた威は意を決して裕穂に尋ねた。

「それ、何に使うんですか？元は俺の物ですから訊く権利、ありますよね？」

威の言葉にきよとんとした裕穂は、少し考えた後、艶やかに微笑んで見せた。

「内緒」

その一言にみんなが（ああ、やっぱり）と諦めの表情をするのを確認した彼女は「くすくす」と楽しそうに笑う。

「と、行きたい所だけど……ま、とりあえず威くんの言葉も正しいから応えるのが礼儀だよ」

にいと引かれた唇に、今更ながらに後悔の念を覚えつつも威は大きく頷いてみせた。

裕穂はそうつと髪の入った包みを抱え上げ、軽やかな足取りで

「鬘だよ」

「……鬘？」「……」

彼女にしてはありきたりな答えに全員が訝しそうにしながら、首を傾げた。

だが、戦利品を腕に抱いた彼女は周りの視線など一向に気にすることなどなく、

「それじゃ、後は宜しくね」

と、残すと恋人である剣人を引き連れてさっさと生徒会室から出て行ってしまった。

相変わらずの破天荒さを見せ付ける『前』生徒会長の様子に新聞部ならびに放送部は『現』生徒会長に哀れみの視線を送った。

威はその視線を受けながら、自分と同じく微妙な表情かおをしている幼馴染みに溜息混じりに問いかけた。

「あれってさ、鬘になったら、何に使われると思う？」

「それよりも、誰用の鬘に仕立て上げられるのが問題だろ」

同様に複雑そうな顔をしながら応えた冴野の姿に、威は「だよなあ」と呟き頭を少し涼しくなった頭を抱えたのだった。

夢見の家 選挙14（終）（後書き）

とりあえず、『選挙編』が終わりました。長かったです。本当に何をだらだら書いてるんだと自分でも思いました。

この後、選挙戦のこぼれ話的な部分と次話のイントロダクション的なものが入ってから『追憶編』へと突入します。

夢見の家 選挙 番外：小さな対決

威を生徒会長立候補してすぐに、隼人は校舎裏へと兄の恋人である裕穂を呼び出した。

この学園において通常の選挙をする場合、前生徒会長の推薦は大きい。それを彼女は恋人の弟ではなく、赤の他人に行うというのだ。更にいうならば、その候補者自体、彼女自身が協力を推して立候補させたと聞いている。

「どうして！僕の邪魔をするような真似をするんですかっ！あなたは僕の兄の恋人なんですよっ！普通なら僕を応援するのが筋ってもんでしょ」

噛み付きそうな剣幕で当然とばかりにそんな科白を怒鳴りつけてきた隼人に、裕穂は呆れたように肩を竦めた。

「君の理論で行く場合、僕が応援しなきゃいけないのは冨野くんだよ。君は剣人の弟ってだけだけど、冨野くんは弟プラス僕の幼馴染でもある。だがそれは本人の希望で却下されたから、当初の予定だった理くんの弟である威くんへと切り替えた。どこか僕の言葉におかしいところはあるかな？」

冷徹なまでに理路整然とした返答に隼人はかああっと頬を怒りで赤く染めた。

「あんな妾腹なんか！」

吐き捨てるように声を荒げる隼人に、裕穂はすうつと表情を消しその言葉を止めさせた。

「ずいぶん、下卑たことをいってくれるね。君のそういう発言が会長候補に相応しくないと僕が結論づけているところなだけどわかってるかな」

声はまるで小鳥が歌うように可愛らしいのに、その中に含まれる毒が廻りを一瞬で凍らせる威力を持っている。彼女は小首をかしげて見せながら自分のポケットの中から小さな機械を取り出して見せた。

裕穂の手に乗せられたそれはボイスレコーダーだった。それもしつかりと録音のランプまでついている。自信に満ちた言葉や態度からしてそれが記録を開始したのは彼女がこの現場に来る前からだろう。「そんなものっ！」

証拠となる機械を壊そうと一歩足を踏み出して伸ばした腕は、いつの間にか彼女の傍に来ていた剣人によつてがっしりと手首を捕らえられていた。

「兄さんっ！」

隼人は非難するために兄の顔を見上げて、ひつと息を呑んだ。その瞳が今まで一度も自分に向けられた事のない冷たい色をしていたからだ。

「いい加減にしろ、隼人」

低く響いた声に、隼人は唇を噛んだ。かつて自分を優しく見守つてくれていたはずの兄は、今や恋人である尊大な女を選び、あるところか家を出て異母弟と一緒に暮らしている。

確かに親切を空売りする親族から自分だけが本妻の子供で目の前の兄も卑しい妾の子供だときいている。でも、そんなことはまったく関係ない。隼人にとつて兄は多大な期待を押し付けてくる母や無自覚な悪意を晒してくる親族から守ってくれる盾であり、旧家である山下の家を継ぐに相応しい唯一の人物だ。

それを自分にとつては他人に等しい者たちが勝手に扱ふことなど許されるはずがない。

もつといえは、兄が自分の味方にならなくなったのは「彼女」と「彼」が惑わしたせいだと隼人は思っていた。

「兄さんも、言ってください。あんな血筋だけよくて後は引き取られた義兄に負けていた一年生なんかより僕のほうが会長に相応しいつて」

縋るように見上げてくる隼人の視線に剣人は眉根を寄せた。

本当の所、剣人には弟が会長職などという上に立つ立場が向いていないことは判っている。だからといって、異母兄だとわかった後も

自分の跡だけを追っている隼人を切って捨てれるほど彼は厳しく出ることも出来なかった。

そんな剣人の心の機微を読み取った裕穂は大きく溜息をつくと先ほどよりもっと冷たい視線で兄に縋っている隼人を見下した。

「君ではこの学校の生徒のための最高の生徒会を作ることなど無理だよ。力不足だ」

最後通牒を突きつけるように発せられた言葉に、隼人はがくりと膝を落とした。

そんな弟へと手を差し伸べようとする剣人の手を裕穂は軽く止めると無言で首を振って見せた。

「それでは、これで失礼するよ。僕の手元に君がさつきまで発言した暴言があることを忘れないように以後、行動してくれ」

剣人には何も喋らないまま、裕穂は地面にくず折れて頭を落としている隼人に言葉を投げつけて背を向けた。

剣人は何か言いたそうに自分よりも30センチ以上下にある恋人の旋毛を見ていた。

自分の手を引っ張る小さな手が、剣人の行動を制するようにぎゅゅと握られる。

そんな彼女の意地っ張りな行動に彼も無言で頷き、出来るだけ前だけを向いて歩き始めた。

隼人から大分離れたところで、校舎に入った二人は人気のない廊下の一角で足を止めた。

「ごめん、君の弟に酷いことをしているのはわかってるんだ」

裕穂は顔を伏せたまま、剣人に謝る。背の小さな彼女がそうすると身長が基準よりも高い剣人にはその表情が見えない。

「ありがとう。俺は隼人あいつに負い目があるから、強く出られない。お

前にはっかり悪役をやらせてごめん」
剣人は自分の胸の下にある恋人の頭を腕の中へと抱き込んだのだっ
た。

夢見の家 選挙 番外：小さな対決（後書き）

長くなりました、『選挙編』の番外です。

話の時間枠としては『選挙5』と『選挙6』の間、『選挙10』にて隼人が悪態をついていた部分にかかっています。

内容的には書いていくうちにBLっぽいかと思いましたが、裕穂と剣人は普通のノーマルカップルですし、剣人と隼人の間に何かあるわけではないので、スルーという方向で行きました。

これにて完璧に選挙編は終わり、暫し月路恵吏が主人公の『この場所から』の『Return to Dreamin House』が数話入ります。

その人は静かに書類を見ていた。

先ほどから廻りの電話が引つ切り無しに鳴っては、誰かが出て視線が投げかけられている。しかしそれに応えるのも億劫なのか、左手の甲を向けながら手を振り自分につなぐことを拒否していた。

「プロフェッサー、大学の会計課からの電話は出てください」

優秀な秘書の悲痛な叫びに、仕方なしに受話器をとると指定された外線を取る。途端に早口の英語でキャンキャンとまくし立てられた。

『あまりそのような態度を取られると、研究費の削減をしますよ』
伝家の宝刀とばかりに突きつけられる電話口の声に、その人は鼻で笑ってみせた。

「研究なら個人的財産でどうにかなる。いざとなれば母国に帰ればスポンサーもいる。それよりも今の発言を理由に僕がこの大学を辞めた時に、自分の立場がどうなるのか考えて発言したほうがいいんじゃないか？」

小さい頃から神童と持て囃され、中学の途中で大学側からの要請に近い形で入学したその人にとって彼女の脅しは功を奏しはしなかった。

電話口からかすかに聞こえる齒軋りは、いつも彼女がこの一言で研究員を黙らせていたことの証明なのかもしれない。

「どちらにしる、大学の中に僕の研究のデータを改竄し、更にそれを内部告発を装って学会側に連絡しようとした事実は消せはしない。僕は今、この研究室に残している人物以外はすべて疑っているんだ。もちろん、君達会計課の人間も除外されてはいない」

本来なら学者生命を危うくするその研究データは奇妙に思った科学雑誌の編集者から連絡が当事者に行った。どうということなのかという問いかけに、その人はデータを送信して貰い、それが改竄されていることと、自分の所にある正しいデータと研究の結果を科学雑誌

に返送した。

雑誌側は『その人』の研究のすばらしさと結果の信憑性に太鼓判を押し、誰かの陰謀があるのではと指摘してきた。

『私達は研究データを改竄することなど出来ません。そちらの方達のどなたかが行ったのではないのですか』

「そう思うなら、そういう証拠を僕の前に示せ。ただしでつち上げられた真実などでごまかそうとしても僕の目は誤魔化せない。タイムリミットは、2年。その間、僕はこの大学内のどこの研究所でも研究・開発を行わないことをここに宣言する」

そう高慢に言い放つと、その人はがちゃんつと大きな音を立てて電話を切った。すぐさま折り返して鳴る電話にその人は電話線を抜くことで応えた。

その人はもう一度だけ音の鳴らなくなった電話に一瞥を加えてから、部屋の中の部下達へと視線を移した。

部下達は大方のやり取りを聞いていたのか、苦笑している。ただ、自分達を絶対に信じてくれている上司への信頼がその瞳には溢れていた。

「と、いうわけだから。今から二年、僕はこの研究所から離れる。いいかい？」

「「決定事項でしょ、それ」」

秘書と上位のチーフが同時に発した答えに、その人は「そうなるね」と軽く返す。

「日本にどうしても帰りたと思った時に丁度、やってくれたからね。利用させて貰うさ」

普段のときなら長期で研究室を離れることなど許されない立場だった。自分の母国に帰ることですら眉を顰められることも多く、政府から帰国を阻止されることもしばしばあった。もちろんその場その場である程度の報復はしているし、短い帰国なら振り切つて行くことは多かった。

それでも長期の連休を取らなかつたのは単にこの国は自分の母国よ

りも突出した能力に寛容だったからだ。
それに何よりも、自分の大切な者たちが長期連休になる度にこちらへと来てくれていた。だからこそ態々帰ることをせずに留まっていた。
しかし今、自分の帰国を阻止しようとする者がいたら、どんな手を使ってでも排除する気構えはある。それだけの『理由』をその人は持っていた。

舞台はアメリカ、季節は初冬、主人公は理・威・冨野の幼馴染・月路きじえり恵吏えりと思いい切り違う話の挿入です。

主人公が違いますが丁度この間に入る話なので多めに見てください。

先日自分のもとに『大切な者たち』の内の一人　それもリーダーとも言えるべき麻樹理あきほが、異世界に囚われてしまったとの連絡が入った。

更に理の義父母より、『残された彼ら』が………それも一番傷ついているはずの山下洗野やました せいやがまだ涙を見せずにいることを連絡された。彼のそばにはもう一人の『残された人物』である麻樹威あきたけしかいない。明るく導く彼では洗野を泣かせることなど難しいだろう。

（あの時、あの『風』を止められなかった結果が、突きつけられている）

自分の手のひらをじっと見つめたまだ年若い博士は少し憂いたように唇を噛んだ。口惜くやくしさはいつでも自分の胸の内にある。もっと努力すればこんな結果にはならなかったのではという考えがいつでも自分を苛んでいた。

（かと言って後ろを振り返ってばかりはいられない、か）

かつて理と双壁とまで回りに言われていた『その人』瞳に強い光が宿る。冷静になるために、ゆっくりと広げたままの手のひらをぎゅうっと握り締める。

「渡航と、僕が関与するべきことをすべて終わらせたなら、旅立たせて貰うよ」

「そうになると、年明けになりますか」

自分が支えるべき博士の言葉に秘書はスケジュールの記された手帳へと一通り目を通し、冷静に予定をくみ上げた。

大学側だけでやっている研究を中断させても、他の大学や企業の研究室それに国家から委託された共同プロジェクトまで離れることは少しの期間でも難しい。メール等のやりとりだけで処理できるようにするだけで最低2ヶ月の猶予は必要だった。

もちろん、これでもこの部屋の主といえる天才博士が昼夜たがわず

働いて上で、だ。

「共同研究の部分の処理があるからね。仕方ないって判ってるよ。ただし、年が明けたら旅立たせて貰うからね」

自身でもそれがわかつているのか、『その人』は苦笑しながら承諾の言葉を述べた。

それから片手ではんつと机を叩くとにんまりと笑ってみせる。

「それから君達の給与が大学側から支給されない場合は、僕のほうに言ってくれ、二年間、君達を養っても大丈夫なぐらいの蓄えと収入の宛てはある」

自分の行く先よりも目の前の部下達の給与への責任を口にするなど、あいかわらず研究者としては珍しく研究以外に目が届く博士の言葉だった。

その何気ない優しさに本来なら窮地に立たされている研究室はその状況に相応しくないほどの大きな笑いに満たされた。

「その前に、大学側に対して給与不払いの裁判を起こしますよ」
笑いながらいう研究員達に、博士はにやりと人の悪い笑みを浮かべる。

「いや、そんなことしないでいいよ。どれだけあのアホ教授が色々と手を尽くそうとも大学は僕を絶対に呼び戻す。その時にきちんと賠償を支払って貰う。下手に裁判を起こしても弁護士費用が無駄になるだけだよ」

「その交渉、まさか私にやらせるんですか？」

『その人』の言葉に厭そうに眉を顰める秘書の姿に笑いはヒートアップする。

博士も彼女の不満そうな表情に、ここ最近なりを潜めていた笑顔を作った。

「大丈夫、そういうのは僕の方が得意だよ」

仲間達と遊んだ環境のせいか、『その人』の頭の中には交渉術を含めた経済学のノウハウが叩き込まれている。今では少し無駄になりつつあるその知識を、フル活用してみるのもまた楽しいだろう。

「それじゃ、僕は『大幅長期連休』のための準備に入る」
場を切り上げる言葉に研究員達は表情を引き締めると大きく頷いて
見せた。

「迷惑をかけるが、僕を信じてついてきてくれ」

宣言された言葉に研究員達は親指を立てて応えた。

「yes・プロフェッサー・ツキジ」

「イエス。マム」

「あなた以外についていく気はねえよ」

「エリー、私達を信じてくれてありがとう」

彼らの肯定の言葉に博士は深く頷くと、旅立ちの準備をするべく研
究室内にある自分の個室へと入っていった。

暫く忙しかったので久々に更新です。

今回の反省は主人公の名前を極力駄々ないようにしていたために、筆が遅々として進まなかったことでしょうか。

本編の主人公・理の幼馴染の少女・恵吏ちゃんは親にその頭脳を売られて、アメリカの某大学にて博士をやっています。(きちんと博士号を取った上で、研究室を与えられています)

『その人』
月路恵吏つきじえりは研究室の扉をしっかりと施錠すると大きく溜息をついた。

自分の研究を改竄した人間が今さっきまでいた彼らの中にいないのは彼女にはわかっていた。

目を閉じて、心の耳を澄ませれば隣の部屋の人間達の『心の声』が聞こえる。彼らの中にある自分に対する過大な信頼、それがくすぐつたい。

（まあ、こんなことが出来ることを彼らに言ったらどうなるかわからないけど）

小さい頃、両親はこの能力の片鱗を見せると気持ち悪いものを観るように彼女を嫌悪した。

掛け替えない幼馴染み達と知り合って暫くは、彼らに嫌われたくなくて出来る限り気づかれないうにした。

（そっぴゃ、最初に気づいたのは理だったっけ）

恵吏と同じように心の耳を持っていた少年は、自分と同じように探ってきた少女へ出会ったその日に能力ちからの事を訊いて来た。恵吏が肯定し、自分の中の能力が溢れでてる感じを伝えると、翌日には彼は自分の義父・麻樹良弘あせのよしひろの元へと彼女を連れて行った。

（良弘おじさんのあの能力ちからは想定外はんそくだったよな）

彼女を見た良弘はすぐに目元を綻ばせて、

『ああ、この子も冨野くんぐらい能力があるんですね。どれぐらい能力を残して封じますか？』
と軽く言ってくれた。

その言葉に正直、面食らったのは記憶にしっかり残っている。だが自分の目の前に立つ人がそういう事ができるのは何故か理解できた。理や冨野とみのそして恵吏と同じぐらいの特殊能力を持ちながらも、それを寸分の乱れもなく制御している様さまは驚愕に値した。

だから、心を見透かす能力以外を少し強めに封じて貰った。

その能力を封じたせいで理たちが異世界に攫われた時何も出来なかったが、恵吏は自分の判断を悔いてはいなかった。もし自分の能力を封じていなければ、強大になりつつあった自分の能力はいずれ自分の大切な人たちを傷つけていたはずだ。

「話は、終わったの？」

ふいに誰もいない空間に幼い少年の声が出た。

「ああ、終わった」

恵吏はそれに驚くこともせず何もないはずの空間に苦笑して見せた。

「それよりも姿を現してくれ。これじゃ僕が派手な独り言を言うてるみたいだ」

声の主に向かいそれだけ注意をすると、彼女は自分の机へと向かった。やらなくてはいけないことは山積み状態だ。こうして会話している間もメールやルーチン化したプログラムで仕事を捌いていかなくってはいけない。

そんな彼女の様子に呆れたような溜息を付く音が聞こえ、それと同時に空気が動いた。乱れた風は机の上の書類を少し揺らす、落とすことはせずに収まる。

そして小さな竜巻が収束するように収まると同時に一人の少年が現れた。

年の頃は7、8歳ほどだろうか。栗色の髪をふんわりと後ろで縛り、無風の空中にたなびく様に浮かせている彼は、その印象的な青みがかつた緑色の大きな瞳で恵吏の背中へと向けていた。

「貴女は向こうの様子を僕に聞かないんだね」

少年が不満そうに口を尖らせても、彼女は一向に振り向く素振りを見せない。その手はまるで少年と話しているのを忘れていたかのよう、すさまじいスピードでキーを叩いている。

「ああ、訊かなくても大体は予測が付く。それに予測外のことを聞いたとしても、その事象に対処するだけのことが出来ない状態じゃ

あ、後で聞くのとそう差はないだろ。それよりも、早く全ての肩をつけて駆けつけたほうがいい」

それでも返事をくれるだけ、彼に対する態度はマシなのかもしれない。本当に無視したいときは、集中する振りをして、『聞いてませんでした』とばかりの対応をするのが彼女の常だからだ。

「でも聞いたら、彼らに的確なアドバイスを伝える事だつてできるでしょ？僕はその言葉をそのまま『風』に入れて伝えることが出来るよ」

それでも食い下がろうとする少年の様子に恵吏は少しだけ手を止め苦笑した。

やっと『その人』の名前が出すことが出来ました。

恵更は理と並ぶぐらいの知能と容姿、ずば抜けた体力と大きな歪みを持つ女の子です。リュウファとも理と同じぐらいの昔から知り合いです。

少し口調が固いのは、彼女の周りに幼馴染がないことが原因で、日本に戻ってくれば本来の彼女の柔らかさが出てくると思います。

「人間の世界には『国際電話』っていう便利なものがあるんだよ。リュウファ」

それがあれば本人と直接話すことが出来る。本人に様子を聞かなくても、威と洸野を見守っている麻樹夫妻や彼女の情報ネットワークの一員である『山下剣人』に連絡を入れればいい。

恵吏の指摘に、少年 リュウファはしょぼんと下を向いた。

「それじゃ、ぼくに出来ることはない？」

「そうだな」

気落ちして俯く少年に、恵吏は短く返答する。それが更に彼の肩を落とさせる。

そんな彼の様子に、彼女は優しく眼を眇めた。それは恵吏が幼馴染みとその親たち以外に見せない表情だった。

「なあ、君は僕たち3人の知らない理の姿を知ってる？」

「……………う、ん。たぶん」

顔をあげた少年は自信なさそうに頷くと自分が知っているその姿と言葉を手を止めていてくれる彼女へ耳打ちした。リュウファの言葉に無言で頷いた恵吏はすうっと目を眇めて見せた。

「ああ、それでいい」

彼女の言葉にぱあつと顔を明るくする。

「その時の理の姿を彼等に幻影の形で見せてやってくれないか？」

恵吏からの申し出にリュウファはきよんとした。

「そんなことで、いいの？」

「そんなことが、いいのさ」

自分の能力からすれば簡単すぎるお願いに不思議そうにしている少年に彼女は落ち着いた口調で肯定した。

どうやら精霊である彼には『人間』がどういふことで喜ぶのかの基準が少しわかっていないようだ。

「えつと、貴女も、その幻影見たい？」

おずおずと声をかけてきた少年に、彼女は目元だけで微笑むと手招きをして自分の膝を示した。

彼は理などに対する態度と自分に対する態度に隔たりがある。恵吏に接するときだけどこか遠慮している旨がある。

「見たい、かな」

恵吏が笑ってそう答えると少年はぱあっと顔を明るくした。

「じゃあ、見せてあげる」

「と、言っても、まだ少し仕事があるから暫く待っててくれるか」机の上に広がっている書類はまだひとつの山を築いている。彼女の實力ならさほどの時間を置かずに片付けられる量だが、それでも一瞬で済ませられる量ではない。

「わかった。ここで待ってるよ」

リュウファは近くにあった椅子に座ると、もの珍しそうに近くにあった本をめくり始めた。

その様子に安心したのか、恵吏も書類へと意識を戻した。

……

しばらくすると、幽かな音が、恵吏の耳に入ってきた。

気づかれないようにリュウファの方へと視線を向けると、彼は本を眺めながら無意識に鼻歌を奏でているようだった。

少し高めの綺麗な音階が部屋を満たす。その音楽は聞き覚えがないのに、どこか懐かしい感じがした。

……

恵吏は彼の歌に優しく眼を眇めながら、目の前の書類を処理している。この分だと、予定よりも早く処理ができそうだ。

書類が終わったら、彼が気付くまでじっくりとこの歌を聴いている

のもいいだろう。

そして、歌と幻想のお礼は、料理でも作ってあげようか。

（そういえば、前に僕が作ったお菓子を嬉しそうに食べていたな）
味だけなら、断然、冨野がつくったお菓子の方がおいしくだろうに、
彼はわざわざ恵更が作った方のお菓子を選んで食べていた気がする。

（腕によりをかけて、お礼をしてやるか）

彼女はひそかに口元に浮かべると、本日処理しなくてはいけない最後の書類にペンをいれたのだった。

やっと、完結です。『夢見』の間の話ということで、必要な複線として急遽、書き始めた話ですが、やっとこさ終わってくれました。時間がかかったのは、詰まったからなのか、ゲームをしていたせいなのかは内緒です。

次回からは舞台を日本に戻して『夢見の家 追憶』になります。久々にファンタジー色のある話になりますので、よろしくおねがいします。

夢見の家 追憶1

町のいたるところが赤と緑に彩られると心弾むクリスマスがやってくる。

街角には様々な体型のサンタたちが点在し、どことなく全ての人が浮き足立って見える。

夜ともなればネオンで満たされる街路樹には小鳥が寄り添いながらちいちいと小さな声をあげていた。

麻樹威^{あさぎたけ} 十六歳・冬・クリスマスイヴ

年末も近づくこの時期に、威はそんな景色を眺めつつゆっくりと帰路を歩んでいた。

去年までは「あれをしよう、これもやらなきゃ」とこの時期、胸が弾んだものだったが、今年はどうも今一盛り上がれない。

その原因もわかってるので、彼は小さく白い溜息をついた。

「どうした？ 今日帰ってきた成績表、よっぽど悪かったか？」

威と一緒に帰途についていた山下^{やました}洸野^{こうの}はからかうように、訊ねてくる。

「山下よりも悪くはなかった」

彼からのからかいが自分の気持ちを浮上させる為の発破だと知っている威は、そうおどけてみせるともう一度綺麗に飾られた町並みへと視線をめぐらせた。少し薄暗いのは白い雲が大量に空を覆いつくそうとしているからだろうか。もしかしたら、今日は雪が降るかもしれない。

「今年は恒例のクリスマス会、どうする？」

毎年、クリスマスには恒例として4人の子供たちと麻樹家の他のメンバーを交えた小さなパーティが開かれていた。パーティといっても、いつも綺麗に飾りつけられたもみの木の下でプレゼントを交換

しい、その後は普段より豪華な食事をして夜遅くまで遊び続けるだけのこじんまりとしたものだ。

去年、そこには自分達と共に威の義兄・理と妹の由宇香と威の両親が揃っていた。彼らの幼馴染である月路恵吏はアメリカから一時帰国すらできなかったが、国際電話で連絡をくれた。

今年はその半数さえ揃わない。

理は異世界に飛ばされ、もともと身体の弱かった由宇香のわずか十年の短い人生は終焉した。威の両親もどこかの資産家のパーティーに呼ばれていると言っていた。もちろん、アメリカにいる恵吏は帰ってくる予定すら入っていない。

「2人だけかあ」

麻樹の屋敷にはたくさんの使用人はいるが、家族やごく親しい者の存在とは違う。

「兄さんでも呼ぶ？」

軽い口調で提案する冨野に威は眉根を顰めた。

「そんなことしたら、御園先輩みそのに後で何をされるか」

恋人と二人きりのクリスマスを楽しむにしていた彼女の報復がどうなるか考えるだに恐ろしい。

それも、言いだした冨野でなく、威自身にその報復が降り注ぐのは目に見えて解っていた。

「まあ、2人でやるとして、山下はどういうのを考えてる？」

威が質問しながら自分よりも幾分か高い幼馴染の顔を見上げると、彼の顔には壊れそうなくらい儂い笑みが浮かんでいた。理の件以降、ある程度復活していた威とは違い、彼の心は未だ混迷の中にいる。ただそれを表に出せる人間が日本にはいない。その事が威には寂しくて口惜しかった。

「そうだな、いつも通りのリビングだと広すぎるから、理の部屋を使わせて貰って……心行くまで昔話でもしようか」

少しだけ長めの茶色い髪が、風で微かに揺れている。

隠しても隠し切れない寂しいという感情が、風に揺らいで垣間見え

るようだ。

そう感じることをおくびにも出さず、威は「わかった」と笑って見せた。

「それじゃ、直に家来るか？」

威の提案に冨野は小さく首を振る。

「いや、一旦、家に帰ってから行くよ。裕穂さんに『食事の下拵えだけはしておいて』って頼まれてるから」

正確には『もし冨野くんだけで出かけるのなら』という前置きがついていたのだが、その辺りは省いてもだいたい威に意味は通る。その証拠に冨野の傍に唯一残った幼馴染は「いいように使われてるな」と冨野の返事に苦笑で返してくれた。

夢見の家 追憶1（後書き）

やっとこさ始まりました。夢見の家の第四弾です。

時間的な流れとして、『この場所から Return to Dreamin' House』の直後のお話となります。久々にファンタジー色のあるお話なので、頑張ります。

夢見の家 追憶2

「それじゃ、夕方に」

分かれ道で軽く手を振り別れると、威はそのまま屋敷の門へと向かった。

彼の姿を確認した門衛は「お帰りなさいませ」の言葉と共に人が一人通れる分だけ門を開ける。

威は軽く「ただいま」と応えると屋敷へと通じる長い道へと歩を進める。ここからは庭師以外の人間はいないだろうから、彼はゆっくりと空を見上げながら歩いた。

(雲が多いし、気温はあがらないし、こりゃ本格的に雪が降るかな) 冨野が来るまで何とかもってくれればいいな、と考えながら歩いているといつの間にか屋敷へとたどり着いた。

「お帰りなさいませ、威様」

年配のメイド頭・大野木美智子は威が到着するのを安堵の表情で迎える。彼女がこういう表情で威たちを出迎える様になったのも、理がなくなってしまうからだ。小さな頃から見守ってきた『坊ちやまの片割れ』が自分が見送った後に行方不明になってから、彼女は威が帰ってくるのを確認するのを日課にしている。

「ただいま、美智子さん。夕方ぐらいに山下が来るって言うから夕飯の用意お願い。後、俺、今から寝るから山下が門を通ったら起こして」

「はい、わかりました」

努めて明るい口調で笑う威に彼女は目を細め、すっと頭を下げた。

つんつ……………つんつん……………

頬をつつかれる感触に威は眉を顰めるとゆっくりと目を開けた。

「お、やっと起きたか」

視界の先には穏やかに笑う幼馴染の姿。新緑色の瞳がおかしそうに自分を見ている。

「あれ? ……お前が門についたら起こして貰うように美智子さんにお願ひしたんだけど」

ぼけぼけする頭を何とか回転させ眠る前の事を説明する威に、洸野は肩を少し上げて苦笑した。

「ああ。普通に美智子さんが起こしに行こうとしたら、その権利をかけてメイド達の戦争が勃発したそうさ。事態收拾のためにも俺に起こしに行ってくれて美智子さんに頼まれた」

そういえば、最近こういう事が何度か起こるようになってきた。

以前は実質、麻樹家の後継者である理の成長と伴い出てきた小競り合いだった。しかし理は家族か幼馴染み・美智子さん以外が起こしにくると非常に機嫌が悪くなり、下手すると部署変更などの憂き目に会うのですぐに下種な争いは沈下した。

しかしその理が行方不明となり、後継者足るべき人物が威だけになった途端にメイドたちは『未来の家主』となる少年に色気たっぷり群がった。

さすがに度が過ぎる女性には威も両親に訴えて退職願ったが、普通に近寄ってくる人間に冷徹に接することなど出来ない。

それが義兄と自分との『後継者足りえるか』の差異であることを威は重々に理解していた。

「料理は理の部屋に運んで貰っておいたから、お前はせめて制服から着替えて来いよ」

洸野の言葉に、威は自分が制服のままベッドで横になっていたことに気づいた。彼は「ふわあい」と未だ眠気の残る返事で応える。

「それじゃ、先に行ってる」

洸野はベッドの端から立ち上がり、入り口のドアを開けた。

それから何かを思い出したのか、ゆっくり振り返ると着替え始めた威に楽しげに声をかける。

「今日は、月路から届いたサプライズがあるから、楽しみにしてるよ」

「はあ？」

制服のネクタイを取りながら、威は訝しげに返す。

少なくとも彼女から、『今回のクリスマスは戻れない』旨をすでに受けている。ならば何か特別なプレゼントでも届くのだろうか。

「いったい、何なんだ？」

威が再度問い返すと、洸野は「教えたらサプライズじゃなくなる」とはぐらかしてきた。

「俺も楽しみにしてるんだ。早く、部屋に来いよ」

その言葉と共に閉められたドアを暫く威は無言で見つめる。

それからおもむろに着替える手を早めた。

彼が『楽しみ』にしている事が何なのか、久しぶりに感じるわくわく感だった。

夢見の家 追憶2（後書き）

なんとなく『若いメイドにとってみれば若い（高校生）の次期当主は狙い目だ』というお話になってしまいました。

理は威と違い、寝起きが悪いし、自分の中での『身内（仲間という観点を含む）』と『他人^{それいがい}』を区別するのでこういう騒ぎの場合、さつさと他人を切ります。

夢見の家 追憶3

威が理の部屋に入ると、既に食事の用意がされていた。どこからかすねたのだろうか、洗野の横にはブランデーまで鎮座している。

「本当によく寝てたから、十分、準備ができた」

との言葉どおりに、並べられた料理は洗野がこの屋敷に到着してから作ったものようだった。どうやら彼が門を通ってから威の部屋に着くまでのメイド同士の抗争はかなりの時間に及んでいたようだ。外を見るとすでに陽はとうに暮れていて、月も星の光も存在しない中、塵のような白いかけらが舞い踊っていた。

「天気予報どおりにホワイトクリスマスだな」

威がそう呟くと、洗野は「そうだな」と返してテラスへと続く窓へと近づく。そっと開けられた窓からは身に差し込むような冷気が入ってきた。

少し眉根を顰めた威を尻目に、洗野は窓を更に開けてすうっと手を差し伸べた。

「月路からのサプライズの前に紹介するよ」

その言葉と共にふわりと暖かい風が駆け抜け、差し出されている指の先へと凝縮していく。空気なのだから透明なはずなのに、青や緑の光が生まれ、それが小さな中性的な顔立ちの少年を形作った。

「始めまして、だね。威」

につこりと笑うその顔は年齢で行けば十歳ぐらいだろうか。大きくて澄んだ青緑色の瞳が飾られた可愛らしい造作、その顔を黄色が強い黄土色の髪が飾っていた。

見た目だけなら普通の外国の少年となる。しかしその足は全く地面についておらず、長い髪は重力を受けずにふわふわ宙に漂っている。

「あ、ああ………ってこいつ誰？」

何とか詰まりながらも挨拶に応えた威だったが、すぐさま不思議少年の手をとっている幼馴染みに詰め寄る。ここ最近、人外の者や特

殊能力者（自分を含めて）に慣れてきたものの、改めて紹介されるような覚えはない。それも『遠い土地にいる親友』からのサプライズの前での紹介なんて、さっぱり理由が思い浮かばなかった。

「僕はリュウファ。この世界ちきゅうにおいて風を司る者を統べる者だよ」
リュウファと名乗る少年は目を細めながら自己紹介をすると、とんと床に下りた。

それから下から覗き込むように目の前の威を見上げた。

（宙に浮いたままの方が話しやすすくないのかな）

下からの視線を受けながら、威はその顔をまじまじと見つめた。この顔はどこかで見たことがあるような気がする。

（あれ？）

似ている。確かにこうして見上げてくる視線が、ここ最近、見慣れた彼女と酷似している。

「御園先輩みそのの親戚？」

突拍子もない威の言葉に、リュウファは目を丸くし、冨野は納得したようにぼんつと手を叩いた。

「なんで、そうなるかな。僕、人間に見える？それともその御園先輩は人間じゃないの？」

人間じゃない、の方に頷きたいのをぐつと堪えて、威と冨野は「そうだよな」と何とか答えた。

そんな二人の様子にリュウファは笑みを深める。

「でも、かなりいい所ついてるよ。彼女も属性は『風』だからね」
くるくると回る表情と悪戯っぽい視線は、本当にそっくりだ。しかし改めて観察した顔立ちは裕穂ゆうほよりも威たちの幼馴染である月路恵つきじえ吏りのほうが似ているようだ。

「それじゃ、月路も風の属性？」

再度威から投げかけられた問いに、リュウファは曖昧な笑みを浮かべ「そうなるかな」と答えた。威と冨野は視線を交わすと、これ以上この話題で話を進めるのを止めた。

「で、こいつがサプライズに関わってるの？」

話を最初の話題に戻しながら、威はリュウファを指差す。

「そういう事らしい」

冨野はそう返しながら、「だよな？」とリュウファへと視線を投げかけた。

風の少年はその問いに大きく頷くと胸を張ってみせた。

「恵吏に頼まれて来たんだ」

「月路に？」

誉めるとばかりに見上げてくるリュウファの頭を威はぼんぼんと撫でる。その行為が嬉しいのか、彼は満面の笑みで肯定してみせた。

夢見の家 追憶3（後書き）

威、リュウファと初めて出会う、です。リュウファは地球世界を巡る『風』なのでいろんな人物を知っています。とくに威の家族や洗野の家族、それを取り囲む人物達のような特殊な人物にはしっかりと目をつけて見守る（監視？）しています。

それでも理と威がキユスリアへと飛ばされるのを止められなかったことをとても悔やんでいます。

夢見の家 追憶4

それにしても自分の周りにいる人間は『普通ただの人』ではない者が多い、と威は自分のことを棚上げして改めて思った。

目の前にいる風の少年は勿論のこと、それらと同属性と言われ使いつ走りにまで使っている恵吏、炎を自在に操り封印から何からやっのかす威の父親・良弘、異世界の人間にまで評価される森の能力を持つ洸野、異世界の闇の王とかいわれた義兄・理……威自身だつてその世界では光の王とか言われていた。

もしかしたら自分が知らないだけで他にも突出した異能を持つ人間はこの世界には溢れているのかもしれない。威はそう思い小さく苦笑した。

とりあえずは、目の前の少年の申し出が何であるのか、彼等の幼馴染の少女が何をサプライズにしたのか聞いてみるべきだろう。

「で、何を頼まれたんだ？」

興味深そうに訊く威にリュウファは得意満面に口角をあげて宣言した。

「理の夢、クリスマスバージョン」

「「はあ？」」

声を揃えて訝しげな視線を送ってくる威と洸野に、少年は「ちっちつちっ」と少し古い映画みたいに指を立ててみせた。もしかしたら、外見よりももつと年上なのかもしれない。

「2年前のクリスマスでの理の姿だよ、見たくない？」

2年前といえば彼等の幼馴染である恵吏がアメリカに旅立った年になる。

（そういえば、あの日、変な化け物ができて大変だったな）

奇妙な化け物ができて襲われて、なんか誰かきて終わったそんなどたばたな一日だったような気がする。ただ今ではそんな特殊な記憶ですら、それ以後の椿事や騒動のせいで、茫洋な記憶の中のあり

ふれた一つとなつてしまつていることに彼らは少なからず苦々しさを感ぜずにはいられなかつた。

「それが月路からのサプライズなのか？」

サプライズが何なのか聞かされていなかつた洸野が問いかけると、リュウファは「うーん」と跋が悪そうに頭をかいた。

「ていうか、先にこれを恵吏に見せたら『これは理から二人へのメッセージなんだからきちんと見せなきゃだめだろ』って叱られた」
「どうやら人との交流が乏しい（と思われる）リュウファにはそれが理からの『メッセージ』を含む記憶だと認識できていなかつたらしい。」

もちろん、指摘を受けた彼は大慌てで二人に見せに行こうとした。

しかし恵吏に彼女はそうするよりもいい解決法があると、彼にサプライズにするよう提案した。

実際、彼女が言うとおりにこの時期に見せたほうが、メッセージを託した理の意に合うようだ。

「えっと、二人の了承が得られればすぐにも取り掛かれるけど、どうする？」

最終結論を委ねてきたリュウファに、二人は視線を合わせると深く頷いた。

理からの言葉が聴けるなら、動いている姿が見れるなら、過去の記憶の映像であろうとも諸手をあげて見たかつた。

了承した二人にリュウファもにっこりと頷いて返した。

「それで、どうすりゃいいんだ？」

それでは、とばかりに行動に移してもらおうと問いかけた威に、リュウファは部屋の中を見渡した。そしてベッドの傍に置いてあつたクッションを適当に並べ、それを指で示す。

「ここで横になつて、目を閉じて。後は僕が何とかするから」
年相応にも見える笑顔の申し出に二人は素直に従つた。

目を閉じると同時に、彼等の枕元に座つたリュウファは静かに手の平を彼等の額に置く。それと同時に暖かい風と包むような光の温も

りが二人を包んだ。

「それじゃ、おやすみなさい」

優しいその声は、先ほどまで聞こえていた声よりも少し大人びて聞こえた。

風が更に体に優しく絡みつく。穏やかな光は緩やかな明滅とともに、彼らを眠りの淵へと導いていった。

すうっという感覚と共に意識が遠のき、夢とも現実ともつかない中、彼等の知らなかった物語が目の前で始まるうとしていた。

夢見の家 追憶4（後書き）

やっとこさ、前置き終了です。

ここからはこの話ひさびさのファンタジーセクション（？）です。今回の部分は、前に書いた時とはニュアンス的にもかなり変更したので、書いては消し、消しては書き、入れ替え、立ち代えになってしまいました。ファンタジーの部分はそれほど手を加えなくておいかなと、安易に思っています（それでも多分、変えなきゃいけない部分は山のようにあるとは思いますが）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0516d/>

至空の時 1 . 5 今までの道・それからの道

2010年10月21日22時46分発行